

空手バカ異世界

輝井永澄



ファンタジア文庫

2823



EITO TERRY
輝井永澄
[illustration] bun150

空手バカ異世界

KARATE BAKA IN

DIFFERENT WORLD

口絵・本文イラスト

bun150

序. 空手 VS 炎の魔神イフリート

この世界には太陽が二つあるらしい。そのためか、暑い地方の、それも乾季かんきの昼間ともなれば、二つの太陽が容赦なく照り付けて想像を絶する暑さとなる。

おれがその闘たたかいに挑いどんだのは、ちょうどそんな日だった。裸足はだしの足の裏に、伝わってくる地面の暑さを鮮明せんめいに憶おぼえている。

円形の闘技場とうぎじょう、その周囲を埋め尽くす猪鬼オウケや黒エルフといった観衆たち。彼らの憎悪ぞうおを伴ともなった熱気が、空気の温度をさらに上げていた。

『異世界転移者を殺せ、殺せ、殺せ』——

同胞どうほうや身内を異世界転移者に殺された魔物まものは多い。貧弱な人間が、裏技チートスキルで魔族の同胞を蹴散けちらす——そんな話に倦うんだ魔物たちの、おれのような異世界転移者への反感は当時、最悪の一言だった。

彼らが求めているのは、憎にくき異世界転移者が八つ裂ざきにされる殺人ショーであり、間違まちがってもスポーツマンシップに則のつった対等な試合などではない。

おれは目の前に立つ相手——黒エルフの男と、この決闘の主宰者である大猪鬼とを見比べた。大猪鬼の傍らには、手を縛られた金髪的女騎士が捕らえられている。

「くっ……いっそ殺せ……」

女騎士は屈辱に耐えて唇を噛んでいた。おれがここで負ければ、おれが死ぬだけではない、女騎士も猪鬼どものなぐさみものになってしまうだろう。もつとも——

おれは殺気立つ観衆を見まわした。

『殺せ！ 殺せ！ 殺せ！』

——たとえ勝ったところで、無事に帰してくれるとも思えない。

おれは正面へ向き直った。観衆の殺気に応えるように、決闘の相手である黒エルフが笑う。黒エルフは手を掲げ、なにごとか呪文を唱えた。

——ブウン。

その呪文に合わせるように、宙空に光の線が走り複雑な図形を模る。形成された魔法陣が回転し、まばゆい輝きを放つ。

数瞬後——燃え盛る炎に全身を包まれた魔神が、咆哮と共に光の中から現れていた。

「あれは……炎の魔神!？」

女騎士が叫ぶ声が聞こえた。召喚獣の登場に、観衆はさらに盛り上がる。

「おい！ この闘いは素手同士の勝負という条件だったはずだ！ 召喚術を使うなんて……!？」

金髪的女騎士の抗議に、大猪鬼が太い声で答える。

「なあにかおかしいかいねえ？ 彼は立派に素手ではないか」

「くっ……」

大猪鬼が笑い、おれの本来の対戦相手である黒エルフもまた、勝ち誇ったように笑った。女騎士は怒りに満ちた顔で歯ぎしりをしている。

おれは改めて、目の前の魔神を見た。黒い革で覆われた皮膚、山羊のような角の生えた頭、その全身に燃え盛る炎。20m近く離れたこの場所でさえ、皮膚がちりちりと焼けるようだ。

おれは女騎士の方へ向かい、言葉を投げる。

「……心配するな。空手を信じろ」

「なにがカラテだ！ なんだか知らんが、炎の魔神に素手で勝てるわけが……」
そう訴える女騎士の声をかき消すようにゴングが鳴った。

炎の魔神は、ゆっくりと横に移動する。これがただのラノベなら、迫力溢れる描写で魔神がすぐ突進してくるだろうが、実際の魔物はいきなりそんな行動には出ない。こちらの動きを見定めるように、猛火の奥から冷たい眼を光らせ、機を窺う。

おれは両の掌を正面に向けた構え——前羽の構えを取り、その場で待った。信じろとは言ったものの、うかつに手を出すわけにはいかない——なにしろ、相手は燃えているのだ。素手で下手に触れば、文字どおりの大火傷だ。

炎の魔神がふと、足を止めた——と、見るや、一瞬のタイミングでその長い腕を振り、こちらへ一気に飛びかかる！

「……ッ！」

——熱波が頬をかすめた。

身体を捌いて直撃は避けたものの、これをまともに喰らったら——そう思うと背筋が凍る。3 m近いその巨体からの一撃。かすめるだけでも皮膚が焼け、受ければ一撃で頭蓋が砕けかねない！

2 発、3 発と振るわれるその攻撃。しかし——その軌道は単調、避けるのはたやすい。おれはその燃える腕をくぐり抜け、すばやく距離を取る。

——と、その時、炎の魔神が一瞬身体をのけぞらせ——跳び退ったおれに向かい、その

口を大きく開く！

——ゴォツ！

そしてその口から吐き出される炎の塊！

滝のように巨大な炎の流れ。不意に浴びせられたそれは、瞬時におれの全身を包む。空着手の下の肉体までも消し炭にしようとするその炎、その瞬間、観客たちがどす黒く残忍な喜びに酔い、女騎士が悲痛な叫びを上げるのが聞こえ——

「……ぬうん！」

その一瞬、おれは両の掌を大きく、身体の前で旋回する！

そして炎はおれの手前で、渦を巻いてかき消え——無傷でその場に立っているおれに、一転して客席が静まり返った。

「廻し受け」——身体の前で両腕を交差させながら、内側に大きく円を描き、敵の攻撃を捌く。円の動きによりあらゆる衝撃を受け流すこの技は、完成させれば炎のような不定形のものさえ、その流れを変えて受け流すことが可能となる——それは空手の受け技の、基

本にして奥義！

必殺の炎がかき消され、魔神が動揺したわずかな隙。それをおれは逃さなかった。「はああつ！」

後ろ足を瞬時に引き付け、敵に向かって前足を大きく踏み込み——瞬時に敵の懐へ。そして魔神の燃え盛る身体へと、腰だめから拳を繰り出す！

「だめ！ 防護魔法もなく炎の魔神に触れたりしたら、一瞬で腕が灰に……！」
女騎士が叫ぶ、しかし、もう遅い。おれの拳は炎の魔神へと奔り——！

——バアアン！

次の瞬間、乾いた音と共におれは突きを打ち終わり、そして——魔神がその全身に纏う炎は、煙を残してかき消えていた。

——数m離れたロウソクの火を、正拳突きで消す——空手家が行うそうしたデモンストレーションを見聞きしたことがあるだろうか。

よく誤解されるのだが、あれは拳の起こす風圧で火を吹き消しているわけではない。正拳を突き、伸びた腕を素早く引き戻す——音速にも迫るその一瞬の突きによって、弾かれた空気が真空状態になる、その衝撃が酸欠状態を起こし、炎を消すのだ。炎の魔神が身に纏う炎とて——その例外ではない！

「ちえやあああーっ！」

1発目の寸止めによって消えた炎、そこに間髪いれず正拳五段突き！ 一瞬にして叩き込まれた必殺の一撃×5発。その衝撃に、魔神の身体は大きくくらくらつき、頭が落ちる、そこへ——

ドガアッ！

とどめとばかりカウンターの飛び膝蹴りが、魔神の顎を砕いた。いかに魔神であるうとも、人の形をしている以上、急所は同じである。しこたまに脳を揺らされ、顎を砕かれ、魔神はついに——地響きを立て、倒れた。

——着地、そして残心。

あれほど騒がしかった観客席がしんと静まり返っている。

観客席が暴動になった場合、あの大猪鬼を人質にして切り抜けるか——おれはその時、残心を取りながらそんなことを考えていた。だが、結果から言えばそんな必要はなかったのだ。

「すげえ……!!」

客席にいた猪鬼のひとりがそう呟いた声で、乾いた空気の中に響いた。

それを皮切りに、客席のそこかしこからざわめきが起こり、そしてそのざわめきはいつしか、歓声へと変わっていった。

「これは……」

女騎士は不思議そうな顔をしていた。先ほどまで、「異世界転移者を殺せ」と雄たけびをあげていた魔物たちである。それが今は、目の前の出来事に驚嘆し、歓声をあげている。自分たちよりも貧弱な人間が、武器も魔法も裏技も使わず、肉体だけで強力な魔神を倒してみせた——今、その目で見たその事実。そのことへの、空手の技への純粹な感動が、そこにはあった。

元来、魔物たちは素朴な性格なのだ。力のないものを軽蔑しもあるが、半面、力あるものには惜しめない賞賛を与える。それが彼らの性分なだと、この頃にはおれも漠然と理

解してきていた。

——いつしか、歓声はひとつの言葉を成していた。

『神の手! 神の手!』

その後、おれの二つ名として広く知られた「神の手」、または「その手の者」という称号は、まさにこの時生まれたと言っている。

おれはこの時、この遠い異世界の地で、種族さえ超えて空手の心が伝わったことに感動していた。

大猪鬼は苦々しい顔をしていたが、女騎士を解放した。この状況下で約束を反故にするば、観客の敵意が自分に向くと考えたのだろう。

「すごい……」

女騎士はおれの下へやってきて、観客たちを見まわした。

「そして、貴公の技……素手で魔神を倒すなんて……」

女騎士は信じられないといった様子でおれの手——拳ダコに覆われた拳を見、ぼつりと言った。

「カラテとは……なんだ?」

——「空手とはなにか」。この後の異世界の強敵たちとの闘いの中で、この言葉にはお

れ自身が向き合っていくことになる。

実戦で使える空手の技を追求し、より強い相手を求めて異世界のモンスターたちと戦いまくった——この話は事実であり、これはひとりの空手バカの、真実の物語だ。

第1章 異世界激闘編

1. 空手 vs ミノタウロス

おれが異世界に行つて、最初に戦つた相手の話をしようと思う。

腕試しに挑んだ4トトラックとの立ち合いの中、意識を失つたおれは、その意識の狭間で何者かと話をしていた。

「私は女神、東宮のグレン。世界の運命を司る導くもの。神の意思に従い、あなたをこれから中の郷の第三次元へと導きます」

それは、柔らかく滑らかな響きの声だった。女神を名乗る声は言葉が続ける。

「そこはあなたの世界とはなにもかも違う『異世界』です。そこは科学ではなく魔法が支配する世界であり……」

その声を何気なく聞きながら、おれは考えていた。トラックが突っ込んできたあの一瞬、あの一撃をかわし、エンジンに打撃を加えることができれば、勝機はあったのではないか。いや、まずはタイヤを破壊するべきか——

「……あのね、ここは精神の世界なので、あなたの心の中、だだ漏れてますからね。ちゃんと話聞いて欲しいな！」

言われておればようやく、目の前にいる女の姿に気がつき——そして、愕然とした。この間合いに入るまで気がつかないとは、武道家としてなんたる不覚か！

「まあ精神体なのでそんなもんですよ。説明続けてもいい？」

長い銀髪に丰满な胸。にもかかわらず、しっかりとくびれたその腰のラインは、体幹がしっかりと鍛えられていることを想像させる。

「そうそう、これでもジムには通ってるからね、最近はビートボクシングってやつにハマって……ってちがーう！ だから話を聞けっての！」

そしておれはふと、先ほどこの女神が言ったことを思い出した。この女は今、『異世界』とか言ったか？

「あ、一応聞いてくれたのね。そうそう、あなたは異世界に行くの」

異世界——すなわち、現代の地球とは別の世界、ということだろうか。

「そうそう、いわゆる剣と魔法のファンタジー世界ってやつね」

ということは——もしかして、モンスターとかもいる？

「そりゃもう。よりどりみどりでしょ」



それを聞き、おれは決意した。

人智を超えた魔獣との戦い——これこそ、空手を究める道ではないだろうか。平和な現代、スポーツとしての空手が隆盛を誇る中、「邪道」と言われる実戦空手を追求してきたおれである。相手を求めて世界中を旅したり、牛や熊と戦う無茶もしてきた。そんなおれにとつて、これぞ——異世界こそまさに、神から与えられた試練の舞台！

「神なら今目の前にいるんだけどね……あと、あなたみたいな転移者には、ステータスとか、裏技とかそういうのがあるんだけど……」

裏技？ それはどんな武術だろうか。

「あ、やっと聞く態勢になった。えっと、異世界転移者はいわゆる熱力学の第一法則を無視して、別の次元からエネルギーを引き出せるの。私たちはそれを裏技と呼んでるんだけど……例えばすごい威力の必殺技とか魔法とか、あるいは人間の限界を超えた力とか魔力とか、そういう物理法則無視のヤバイ技が使えるってわけ！ どう？ テンション上がるでしょ？」

——要らん。

「えっ。」

おれの望みは、飽くまで空手の可能性。超人追求は自分の力でやらねば意味がない。

「えっと、でもモンスターとかヤバイよ？ 火とか吹くよ？ 裏技あつても死ぬやついるし、他の転移者とかも……」

たとえここで死んでも……超人の夢と四つに組んでくだけのなら本望！ ここで倒れるなら、おれの空手はそこまでだったということだ。

「いや、こっちにも都合があるから、勝手に倒れられても困るわけで……誰だよこんなやつ寄越したのは」

おれは来たる強敵との戦いに、武者震いがした。この世界の先に待ちうけるのはまさに、戦いの旋風巻き起こる血染めの戦場！

「……あー、もういいや。まあとりあえず行ってきた。あたしも一応後から行くから」

女神がそういうと、おれの意識は、その場から再び遠ざかっていった。

* * *

ふと目が覚め、おれは自分が固い地面に倒れ、石造りの天井を見上げていることに気がついた。

「知らない天井だ……」

トラックに撥ねられ、アスファルトに倒れているわけではないらしい。素肌に触れる冷

たい床の感触、薄暗い周囲、そして——周りに倒れる鎧姿の人間たち。

「なんだ、これは……!?!」

おれは驚いてその場に跳ね起きる。確か、トラックとの勝負の途中のはずで——いや、その後になにか、夢を見ていたような気もするが——

「ほう……まだ生き残りがいたか」

男の声がした。

顔を上げ、声の方を見る。そこには地に伏した女がひとり。そして、薄水色の服に蒼灰色の髪の毛、その女の前に——立ちほだかる、巨大なバケモノ!

一瞬、おれはそのバケモノが喋ったのかと思っただが、どうやら違ったようだ。バケモノの後ろに、男がひとり——銀色の胸当てに黒い外套を翻し、立っていることに気がつく。

頭がはつきりしてきて、おれは状況を理解した。女神と名乗る何者かとの会話——夢だろうかと思っただが——

「……つまり、ここがまさに『異世界』……」

おれは思わず感嘆して、そのバケモノを見上げた。人間の3倍近くはあるだろうかという巨体は体毛に覆われ、はるか上に見上げるその頭には巨大な角、そして大きな鼻と口。その顔は牛のようであり、またとびきりに野蠻な人間のようなでもある。その片手には、人間大

ほどの巨大な棍棒——というよりほとんど丸太。おれの生まれた世界ではまずお目にかかれない、非常識なスケールの、これがつまり「モンスター」——

——ズウン!

地響きがした。

そのバケモノ——牛のような角をした巨人が、足を踏み出してこちらに向き直ったのだ。

「やれ、牛頭魔王」

男がバケモノの後ろから声をかけた。それに応えるように、バケモノが吼える。

「……その人、逃げて……!」

倒れていた女が上体を起こし、こちらに向かって叫ぶ。それはか細いながらも、しっかりと芯の通った声だった。おれはその声の主である女へ——こちらへ向けたその顔は、ほとんど少女といったあどけないものだった——ちらりと目を向ける。

「逃げる……?」

おれは込み上げるなにかを抑えきれず、思わず口に出して呟いていた。

——とんでもない。これこそまさに、求めていた状況だ。おれはその女に向かい、言う。

「……大丈夫だ、牛なら何度か、倒したことがある」

その時、おれの顔はきつと笑っていたのだろう。

ゆっくりと息を吸い、腹に溜めて、吐く。

両足を肩幅よりも足ひとつ分、大きく開いて踏みしめ、膝をわずかに内側へ、力を溜めるように、重心を作る。

まず丹田へ、そして身体中へと呼吸を循環させながら、両腕を上げ——左足を一步、踏み出しながら、手を眼前へ。

「どんな相手だろうと……ケンカなら喜んで買うぜ！」

前羽の構え——両の掌を前方へ向けて構え、おれはバケモノを迎え撃った。

——ガアアアアツ！

牛頭魔人が再び、吼えた。女がまたなにごとか叫んでいた。しかし、おれの耳にはもう、どちらも入っていないなかった。敵と相対し、世界から色と音が消える。この感じ——ああ、そうだ、この感じだ。

敵が動くのが見えた。おれの身の丈よりも大きな、その棍棒が振り上げられる。

おれは、その棍棒が振り下ろされる先から、ステップを踏んで身体をどかす。

——ガウン！

石畳を棍棒が砕いた。石の破片が飛び散り、床にクレーターができる。あの体格から振るわれる巨大な棍棒の一撃——さすがに大した破壊力だ。しかしその瞬間には、おれはもう次に来る攻撃を避け終わっている。

牛頭魔人がその棍棒を返し、横に振るう——その時、おれはすでに敵の懐へと踏み込んでいた。

巨大な武器は威力も大きいが、その分攻撃パターンが限られる。いくらパワーがあつたとしても、あの棍棒が取り得る軌道は数種類しか存在しない。選択肢が限られることは、立ち合いにおいて最も警戒すべきことのひとつだ——巨体の重心移動を見ただけで、おれには10手先まで攻撃が予想できる！

「ちええいッ！」

目の前には、牛頭魔人の巨大な脚。そのふくらはぎへ、おれは廻し蹴りを叩き込んだ。

ズムツ!!

分厚いゴムの塊を蹴ったような感触が蹴り足に響く——硬い！ 打撃が皮膚で止められ、肉にまで衝撃が至らない。

——グオオオツ！

「……………くつ！」

頭上から牛頭魔人の拳が降って来て、おれはあわててその場を跳び退った。拳が床を叩き、石の欠片を散らす。

「さすがに、普通じゃないか……」

間合いを取りながら、おれはかつて牛と戦ったときのことを思い出していた。動物の皮膚というのは、肉の塊と分厚い皮に覆われており、衝撃を吸収するのに理想的な形をしている。あれを殴ったとき、おれは正直、心底牛がうらやましくなったものだ。人間の皮膚ではああはいかない。

敵が、再び吼える。しかし、牛頭魔人はすぐには襲い掛かってこなかった。その場で身

構え、こちらを威嚇する。

「警戒させるくらいの効果はあったか……ほっとしたぜ」

おれは構えを取りなおした。敵は棍棒を身体の前に水平に構え、じりじりと横へと回るように動いた。

「……………牛頭魔人と、素手で渡りあってる……!?!」

先ほどの女が言う声が聞こえた。ここから女のところまで、距離はかなり離れてはいるが、その動きは手に取るようにわかる。男の方の動きもだ。研ぎ澄まされた集中力——いいコンディションだった。おれは改めて、目の前のバケモノを見る。

——デカイ。5mはある。

かつておれは、武者修行の旅の中で欧米人のプロレスラーと何人も戦ったが、「大きい」というのは「強い」ということだ。攻撃力も防御力も、体格に比例して大きくなる。彼らのパワーには、当時さんさんに苦戦したものだ。

だが——!

「……………あいつらの方が、まだ強かったかな」

おれは構えを変えた。重心を前に移し、左手を下げて右手を引く。

「決着をつけよう………来い！」

おれの叫びに応えるように、牛頭魔人が吼えた。肩口に棍棒を構えたまま、突進してくる。先ほどのように大ぶりにはならず、両手で持った棍棒をコンパクトに振る。いい打撃フォームだ。才能あるな、こいつ。

「……だが、甘い！」

おれは上へと、跳んだ。足元の地面を棍棒が砕く。

——ここだ！

おれはそのまま、足元の棍棒を蹴り、前へと跳ぶ！

「大きいものが強い」——これは自然界の絶対的な摂理だ。だが、だからこそ、人間の技である空手が付け込む隙がある。

目の前に、牛頭魔人の巨大な顔。そこへ向け、右の腰だめに引き絞った拳を——解き放つ！

——ゴッ！

鈍い衝撃が、拳を通して伝わる。

「人中」——鼻と口の間、顔面の急所だ。おれの放った右の正拳突きが、巨人のそこへと深く、めり込んでいた。

人間を相手にこの狭い急所を狙うには、一本拳や貫手など、打突面の小さい技で正確に突く必要がある。だが——これだけ大きい相手なら、より威力の高い正拳を叩きこむのは、さわめて容易！

その一撃に、牛頭魔人の身体が大きくのけぞった。

「……てりやああつ！！！！」

空中で突きを繰り出した姿勢から、おれはすかさず、蹴りを繰り出す。のけぞりから空きになった牛頭魔人の喉へと、前蹴り！

さらにそのまま、落下するに任せて正拳をもう一発——「水月」、いわゆる鳩尾の急所へ、そして着地と同時に、左の上段順突き！

「……正中線四連撃・対巨大人型生物の型！」

人中、喉笛、水月、そして金的。

人型生物の身体の中心線、「正中線」に集中する急所を同時に破壊され、立っていられる者はいない。それがどれだけ巨大であろうと、同じことだ。牛頭魔人は——地響きを立て、崩れ落ちた。

「すごい……！」

女が目を丸くしていた。おれは残心を解く。巨大なバケモノは泡を吹いて、その巨体を地面に転がしていた。

おれは顔をあげた——と、黒いマントの男と目が合う。

「……その技……」

男の口元が動いた。胸当てと同じ銀色の髪が揺れ、その奥から赤い瞳が光る。

「……空手、だな？」

黒衣の男は、そう呟いてニヤリと笑った。

「貴様、異世界転移者か……面白い」

男はマントに隠れていた左手を出し、掲げた。その腕には、禍々しい意匠の小手がつけられている。女がそれを見て、叫ぶ。

「……それは……！」

「フフ……すでに目的は果たした。また会おう、ウィルマ。また会おう、白衣の次元遊者よ……」

男の身体から光が放たれ、紫色の光が爆ぜた。火花と陣風が迸り——次の瞬間、男の姿はかき消え、エネルギーの残留物だけが渦を巻いていた。

「ふう……」

まずは異世界での初勝利、しかし——おれは目の前に倒れた巨大な牛頭魔人の姿を見た。強力なモンスターではあったが、ファンタジー世界的には遥かに格下のはずだ。そして、なによりあの男——おれは魔法のことはわからないが、相当な手練なのはまず間違いないだろう。

これから待ち受ける強力な相手を思い、おれは戦慄し——同時にまた、高揚も感じていた。

「……そこのお方……」

不意に声をかけられ、おれは振り向く。女が立ち上がり、こちらを見つめていた。華奢な身体に纏った薄い水色のワンピース型ドレス、艶やかに蒼く輝く輝く灰色の髪。その隙間からのぞく耳が、わずかに尖っているようにも見えた。

「この城の騎士……では、ありませんね……？」

「ああ……」

なんと答えたものか——「異世界から来た」などと言って、通じるものなのだろうか？ 先ほどのバケモノを見る限り、ここが異世界なのはまず、間違いはなさそうだが——おれが答えあぐねていると、突然、石段の上の扉が開いた。

「姫様……！」

扉の向こうから初老の男が息せき切って現れる。身体を引きずりながら石造りの部屋の中へと入り、そして——倒れている牛頭魔人を見て目を丸くした。

「これは……？ ジャヴィドは一体、どこへ……？」

そう声に出したあと、男はおれを見、表情を硬くした。

「貴様……何奴！ 姫様から離れろ！」

男はそう言いながら、剣を引きずり、こちらへと向かって来る。

面倒な状況だ。いっそ、逃げ出した方がいいのだろうか——と、迷ったその一瞬。

「おやめなさい、ゲデイス！」

姫様、と呼ばれた先ほどの女が毅然とした口調で言い、ゲデイスと呼ばれた男は動きを止めた。

「この方は賊の仲間などではありません。わたくしを助け、その魔獣を倒してくださいませ」

「この男が……牛頭魔人を……？」

ゲデイスが驚くのと同時に、おれもまた驚いていた。まさかこの小柄な少女といっても差し支えないような女が、おれのことをかばってくれるとは予想していなかったのだ。

おれは姫の横顔を見た。争いの中でほこりにまみれてはいたが、その目には確かに、力強い光が湛えられていた。

* * *

城の中庭に出ると、空はずでに暗くなっていた。電灯などはもちろんついていないが、星灯りに照らされた中庭は思ったよりも明るい。

城の中は、先の襲撃の後始末でまだ雑然としている。怪我をした兵士たちを助けるのは少し手伝ったが、それがひと段落した今、右も左もわからないおれがいても邪魔になるだけだ。

おれは夜空を見上げる。そこには見事な星空が広がっていた。人工的な灯りに埋め尽くされた現代の街中では、こんな星空はついぞお目にかかれない。しかし——そこに瞬く星の配置には、どことなく違和感を覚える。

「……本当にここは異世界なんだな」

「だからそうだって言ったでしょ」

何気なく呟いた言葉に対し、思いがけず返事が聞こえ、おれは振り返る。そこには、長い銀髪と豊満な胸を揺らした美しい女——

「……えっと、誰だっけ？」

「うおい！ もう忘れたんかい！ 女神よ、女神！ あんたをこの世界に連れて来た張本人！」

「ああ……」

そう言われてみれば、この世界に来る前に意識の狭間で会ったような気も——

「……あれ、夢じゃなかったのか」

「今さらなに言ってるの！ まったく、こんな導き甲斐のないやつは初めてだわ……」

女神——確か東宮のグレン、って言ったっけか——は眉間に皺を寄せてこめかみを押さえた。

「だいたいあんた、私の話ほとんど聞いてなかったでしょ？ だから一応、様子を見に来ただけ……」

「それなら心配ない。とりあえず牛頭魔人に勝った」

「だからそういうのを心配してんだけど!? なにいきなりケンカしてんのよ！ 裏技もないのに、いきなり死んだらどーすんの!？」

女神は頭を抱えた。そういえば、夢の中で裏技がどうとか、聞いたような気もする。

「……そもそも、おれはなんでここに呼ばれたんだ？」

異世界に召喚された現代人——大抵の場合は魔王と戦うとか、なにかそんな類の意図があつて召喚されるのではないだろうか。しかし、女神は困ったような顔をする。

「その辺は正直、私もわかんないのよねー。今んとこ、倒すべき魔王とかもないからね、この世界。なんか意味はあると思うんだけど……」

「……そんな無責任な」

「しょうがないでしょ。大いなる意思のやることは、私みたいな末端の女神のレベルじゃ推し量れないことも多いのよ」

女神はそう言つて両手を広げた。どうも、女神というのも楽な仕事じゃないようだ。

「まあ、とりあえずやりたいようにやったらいいんじゃない？ 一応、死なれたら困るから、身体には気をつけてね」

——まったく、興行主のやることなんてのは、どこの世界でもいい加減なものだ。

「……こちらにいらしたのですか」

と、不意に背後から声をかけられ、おれは振り向いた。そこには、先ほど怪物に襲われていた蒼灰色の髪の姫が立っていた。

「……? どなたかいらつしやいましたか？ 話をされていたようですが……」

「え……?」

元の場所を見ると、女神の姿はいつの間にか消えていた。

「……いや、別に」

おれはなんとなく、その場の話を誤魔化して姫に向き直る。

「もういいのか？」

「ええ、ひと段落です。死人がなくて本当によかった」

姫は心底ほっとした、という表情を見せた。あどけなさの残る顔立ち——華奢な手足と相まって、その姿はいかにも儂げだ。

「……改めて、お礼を申し上げたくて。先ほどはありがとうございました」

姫は背筋を伸ばし、そう言って笑った。

「……行きがかり上のことです」

おれはなんとなく、その笑顔から目を逸らしてしまった。成り行きをどう説明しようか、と思っていたのもある。

「……お伺いしなければならぬことが、山ほどあるのですが……」

その雰囲気を感じたのか、姫はもじもじと言葉を濁している。おれは居心地の悪い思いをしていた。早めにこの城を離れた方がいいかもしれないな——と、そんなことを考えていた、その時。

「……あ、あの！」

意を決した、という表情で、姫が顔を上げる。そして、その口を開き——

「さっきのあの技……わたくしにも、できますか!？」

「……はい……?」

予想外の言葉に、思わず声が上がった。そこへ喰いつかんばかりの勢いで、姫はその大きな目を輝かせて身を乗り出す。

「素手で牛頭魔人を倒すあの技、一体なんなのですか? どんな職能系を身につければいいのですか? あなたは何者で、どこの国から来たのですか!？」

一番訊きたいことを口に出したら、止まらなくなつたのだろうか。次から次へと質問を繰り返して、どんどん身を乗り出す姫の攻勢に、おれは後ずさる。この世界に来て早々、まさかこのような苦戦をしようとは——!

「姫様、お客様が困っておいでですよ」

割って入った初老の男の声に、姫ははたと気がついて頬を赤らめる。

「……す、すみません……つい興奮してしまって」

助かった——正直胸を撫で下ろしつつ、おれは声のした方を見る。初老の騎士——ゲデイスが肩をさすりながら、傍らまで歩いてきていた。

「怪我をした騎士たちもみな眠りました。本日はもうお休みくださいませ。お客人にもお部屋をご案内しますゆえ……」

「そ、そうですね……大変失礼しました。このお話はまた、後ほど……」

姫は顔を赤くし、踵を返して中庭から去っていった。

その後ろ姿を見送り、おれはゲデイスに声をかける。

「怪我はもういいのかね、騎士さん」

「姫様に回復魔法をかけていただきましたので。ああ見えて、姫様の魔法の腕前はなかなかなのですよ。折れた骨はすぐには治りませんが……」

「魔法……」

なるほど、そういうのもあるのか。先ほどの怪物——牛頭魔人ミノタウロスというらしい——は巨大ではあったが、力だけだったから対処できた。もし相手に魔法という選択肢せんたくしがあるのなら、戦い方はまた変わってくるだろう。

武者震むしやぶいをする思いだった。おれがこの世界に來た理由——女神からはその答えは得られなかったが、少なくとも、空手の相手には当分困らなそうだ。次の相手は一体、どんな怪物だろうか——

ゲデイスが笑っておれに声をかける。

「さ、こちらへ……転移者の」

「……!!」

その言葉に驚くおれを尻目しりめに、ゲデイスは先に立って歩いていく。おれは慌ててそのあとを追いつながら、その背中に向かって言う。

「……あなた、わかるのか、その……『異世界』のこと？」

ゲデイスは足を止め、振り返る。

「……ええ、知っていますよ。『転移者』には前にも会ったことがあるのでね」

そう言つてゲデイスは、中庭から建物の中へと向かっていった。

2. 空手 vs 重装騎士^き

次に戦った相手は、意外にも人間だった。

「お父様……国王様は今、不在にしているようですが、すぐに戻られるそうです」

王都へと向かう馬車の中で、髪を風になびかせながら、姫が言った。

姫はウィルマ・デル・ウィルム・ヴァンフリーと名乗った。国王の側室が産んだ姫であり、この国の第8王女だという。わけあって中央から遠ざけられ、辺境の城に押し込められていて、とでもいったところなのだろうか——どうもきな臭いが、ともあれおれはこの国の王女を救ったということで、王都へと招かれることになったのだ。

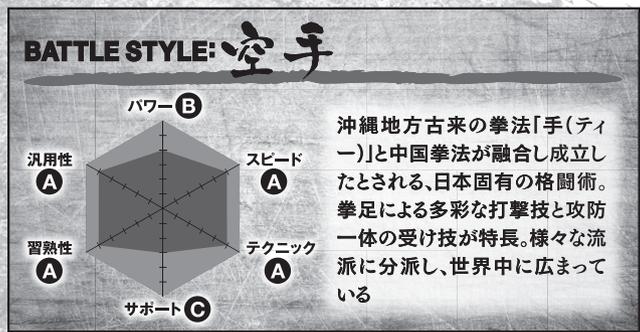
「あなた様の技を見れば、きっとお父様は喜びます！」

ウィルマ姫はおれのそんな思考を余所に、無邪気にはしゃいでいた。

「カラテ……というのですっけ？ あなたの故郷……異世界の国の、ニホン？ という国の、ブドー？」

「ええ、まあ、その……」

空手に興味を持ってくれるのは嬉しいのだが、おれはどう説明したものか、と悩んでい



た。なにしろこの世界のことはまだわからな過ぎる。中国から沖繩に伝わった拳法が独自に発展し——などと説明しても仕方がないわけで。

おれは言葉を濁し、顔を背けて馬車の外を眺める。

二つの太陽が照らす快晴の空の下、馬車は快調に走る。ちなみに、先ほどから「馬車」と表現をしているが、車を曳いているのはトカゲのような二足歩行の生物だ。まあ、この世界の馬つてことなんだらう。そういえば、さつきから普通に言葉も通じているが、その辺りはあまり気にしないことにする。昔読んだ空手劇画でもフランスとかで普通に会話してたし。

「夕刻前には王城へ着くでしょう。大臣のホランド公が、歓迎の宴を用意してくださっているということですが……」

姫の隣に座ったゲデイスが口を開いた。おれはその時、洗濯をしてもらった空手着の肌触りを気にしていた。ところで空手着ってこちらの世界で手に入るのだろうか。現代だとポリエステル製とかが多いが、こっちだと綿になるのか。サラシ木綿なんてものはあるのかな——そんなことを考えていたおれは、ゲデイスの横で姫が少し表情を曇らせたことに気がつかなかった。

街道を半日ほど馬車に揺られると、王都が見えてくる。城壁に囲まれ、その奥の高台には尖塔を備えた城。街の西側には壮麗な塔がそびえている。城壁の外側にまで街は広がっており、粗末な平屋の集まった集落を横目に見ながら、馬車は進む。

集落の中に、緑色の肌をした猪のような顔をした人間や、耳の尖った背の低い人間などが歩き回っているのが見えた。

「猪鬼や半身鬼人、それにエルフ。城門の外の街区には亜人間が暮らしています」

ゲデイスが説明してくれた。

おれは彼らの姿を眺める。人間と同等に文明を持っているが、人間ではない生物たち。体格が違えば生活様式も違う。ああいう者たちに空手を教えるには、なにか特別な稽古のメニューが必要かもしれない。

その内に馬車は跳ね上げ式の城門をくぐり、城壁の中に入った。そこには立体的な街並みが広がる。

石造りの高い家の間を、レンガ造りの路地が網の目のように広がり、そこを人間たちが——見慣れた普通の人間が行き来する。二足歩行のトカゲのような馬や、猪かアルマジロのような姿の動物に荷車を曳かせているものもある。城門の外で見かけたような亜人間は、ここでは見かけなくなっていた。

活気にあふれる街の中を抜け、馬車は目抜き通りの坂道を城へと登って行った。

「ヴァンフリーの王都へようこそ、次元遊者どの！」

でつぷりと太った大臣のホランドがそう言っていて、おれを迎えた。

大きなシャンデリアの吊された大広間、城へ着いてすぐにそこへと通されると、きらびやかな衣装を身に纏った貴族たちと、テーブルに並んだ料理が待ち受けていた。ホランドは一段高いところで椅子に座り、周囲に騎士を従えている。

「次元遊者……？」

そう呼びかけられたことに、おれは首を傾げた。そういえば、あの黒衣の男もそんなことを言っていた。

「ゲデイス卿からそのように聞いている。次元遊者……かつて魔王を退けた勇者と同じ、異世界からの来訪者が現れた、とな」

騎士団の中に交じって立つゲデイスの方を見ると、ゲデイスは口元にわずかに笑みを浮かべ、成り行きを見守っていた。

おれは考えた——つまり、異世界から来るおれのような人間は、この世界でも存在を認知されており、そのひとりがかつて「魔王」とやらを倒したと——で、あれば、あの黒衣

の男が「空手」という言葉を口にしたのも不思議ではない。

「その白い装束は異世界のものか……？　なんというか、変わっているな。ひと言で言えば、なんと言うか、みずばらしいものだな？」

ホランドが値踏みをするようにおれの空手着を見回し、言った。

「まあ、そなたは転移者ゆえ、そのような恰好であるのも仕方はないが……この広間で、ひときわ白が際立っておるなあ」

にやにやとしながらホランドがそう言うと、派手な衣装を身につけた周囲の貴族たちがどつと笑った。

「ホランド公！　客人に向かって無礼であろう！　ましてや、このわたくしの命の恩人であるぞ！」

ドレスに着替えて広間に姿を現したウィルマ姫が声をあげた。

「これは姫様、失礼を。そうでしたな、第8王女であり、半エルフの女の娘であるあなたを、助けていただいたのです」

「……！」

ウィルマ姫の顔色が変わり、そしてまた周囲の貴族たちがぐすくすと笑う声が聞こえた。ホランドはにやにやと続ける。

「まったく、われわれのような高貴な人間にはできぬ、勇敢な行為に恐れ入る。その行為のお陰でこのような場にも顔を出せるのだ。さ、高貴なる酒も料理もある。ゆるりと楽しむがいい。ああ、そのみすばらしい衣装のまままで構わぬぞ」

再び、笑いが起きた。ウィルマ姫は眉間に皺を寄せ、口を真一文字に結んでいた。

——なるほど、とおれは思った。

異世界転移者——次元遊者という存在がこの世界でどれくらい認知された存在であるかはわからないが、それを疎む者も少なからず、いるということなのだろう。特に、支配階級である貴族がいい顔をしないというのはわからなくもない。

つまり、これはそのための宴。王女を助けたおれという余所者に対し、自分たちの方が立場が上だということを誇示するためのものだ。

それにしても——おれは思わず、ため息が出た。異世界だろうとどこだろうと、こういう輩はいるものだ。大勢の前で相手にマウンティングをして見せることで、自分の地位を守ることに汲々とする小心者たち。

おれはその貴族たちの顔に、かつておれの空手を邪道だと批判し、さんざん侮辱した連中のことを思い出した。所詮、異世界でも人間は人間だ。

バカにされるのは慣れているし、そのままやり過ぎしてもよかった。相手にするだけバ

カバカしい連中だ——そう思いはしたのだが。

「……姫？」

ふと横を見たおれの目に、眉間に皺を寄せるウィルマ姫の顔が映る。わずかに尖った耳を持つ、エルフの血を引く王女。きつと、このような心ない言葉をその身に受け続けてきたのだろう。

唇を噛みしめたその顔を見たおれは——つい、口を開いていた。

「……この白い空手着は、神の前に立ち厳粛な儀式に臨む際の、神聖なる装束にその起源を発するもの。清廉さと無私の心を象徴する装束です」

おれは腹に溜めた呼吸を使い、静かに、かつしつかりと通る声で、言った。

「武に臨み、大いなる力に対して謙虚なる自己を以て真実に向きあう……同時に、俗世にとらわれず闘いへと身を捧げる、いわば死に装束でもあります」

おれは、両の足に均等に体重をかけた自然体から、片足ずつ脚を折ってその場に正座した。

「……空手家にとって、この姿は最大限の礼を尽くす姿であり、目の前の相手に対し全霊を以て向きあうことの表明……そして死地に赴く正装であると、心得られたい」

そしておれは両の拳を前につき——地面と水平に、身体を倒す。

「座礼」——空手の稽古の前に、神棚や上座、そして師や同僚、お互いに対し礼を尽くし、全力を尽くすことを誓い、行う作法である。

礼に始まり、礼に終わる。その実は人を壊す技術である空手だとしても——いや、人を壊す技術だからこそ、真剣に向き合い訓練しなくてはならない。それは決してきれいごとの精神論ではなく、極めて実地的な心得なのだ。

ウィルマ姫を、そして空手を見下し侮辱したこの傲慢なデブに、礼を尽くしたわけではない。へりくだるつもりはないが、同じ土俵で勝負する気もない。そしていつでも、この場でお前たちと戦って死ぬ覚悟がある——それはそうした意思の表明だった。

殺気を存分に込めて放った渾身の座礼に、貴族たちは圧倒されていた。感嘆の声を漏らすものもいた。ホランドは鼻白んだ様子で立ち上がった。

「その……カラテとやら。聞けば素手で牛頭魔人を屠つたらしいではないか。それがお前の『裏技』か？」

おれは顔をあげ、言う。

「裏技ではありません。自らの肉体の限界を究め、戦う……それが空手。その技を究める

ことが、おれの道」

「ほう……」

ホランドは顔をしかめ、醜悪な笑みを見せた。そして広間の外へと向かい、大声をあげる。

「……バーガンドを呼べ！」

——ガシヤツ。

ホランドの声に応えるように、広間の入り口に金属音が響いた。

「そのカラテとやらを、ぜひ見せていただきたい。このバーガンドは、牛頭魔人程度なら一撃で殺すぞ？」

一分の隙間もない鋼鉄の装甲に身を包んだ、ヴァンフリー王国の重装騎士・バーガンド。どうやら、おれの次の相手はこの男のようだ。

* * *

全身に板金装甲を纏い、その肩口から一体化して頭上までを覆う兜、手には肉厚の

シヨートソード、クワールシールド
 刺突小剣と長盾——牛頭魔人ほどではないにしろ、2mを超える巨体。その全身が、これこそ肘や膝などの関節さえも鋼鉄の装甲に覆われ、文字通り一分の隙間もない。

その巨体の肩越しに、声がする。

「どうした転移者よ？ 怖気付いたのかな？」

ニヤニヤしながら煽るホランドに、おれは怒りを通り越して笑ってしまった。おれが素手でモンスターを倒したと聞いて、わざわざこういう相手を用意しておいたのかと思うと滑稽だ。ご苦労さん、と言いたくなる。

「卑劣な……！」

ウィルマ姫が言う声に、ホランドは首を巡らせて答える。

「なにをおっしゃいますか。素手で戦うのがその男の流儀なのでしよう。戦士は常に、戦う相手を選べないのですよ」

「……ッ！」

口の減らないホランドの返答に、ウィルマ姫が歯を食いしばる。その隣で、ゲデイスが素知らぬ顔をしているのが見えた。喰えないおっさんだな——おれは半ばあきれつつも、口を開く。

「……まあ、やり口はともかく、そのデブが言っていることは正しい」

そして——そういった理不尽な現実に対抗することこそ、武道の本質でもある。

「デ、デブだと……!？」

鼻白むホランドを無視して、おれはウィルマ姫と目を合わせ、言った。

「大丈夫だ。空手を信じる」

「……!!」

はつとした顔になったウィルマ姫に笑って見せてから、おれは目の前の敵に向き直った。「カラテ……」

ウィルマ姫が低く呟く声を聞きながら、おれは目の前にそびえる重装騎士バーガンドの巨体を見上げる。この世界でも、これほど立派な体格を持つものは稀だろう。それに、広間へと入って来たその動きは——

バーガンドの向こうからホランドが喚く。

「き、貴様……!! 高貴なるこの私になんたる……!!」

「……あなたが異世界転移者にどんな恨みがあるのか、知らないが……」

おれは呼吸を整え、足を開き、前羽の構えを取り——そして目の前の敵に向かい、言う。「どんな相手だろうと……ケンカなら喜んで買うぜ!」

構えたおれに対し、バーガンドが兜の奥でその目を光らせた。少し腰を落とし、盾を

前面に出して剣を小脇こわきに構える。やはり——板金装甲プレートメイルを着たままスムーズに動いてみせたその身のこなし。そしてまた、体格に任せて不必要に大きく構えないあたりからしても、この男はなかなかの手練てねだと見える。

それに——ケンカを買ったのはいいとして、実際、バーガンドの鎧よろいには本当にまったく隙間がなかった。おれは自然石を手刀で割ることもできるが、分厚い鋼鉄の板を突き破るやぶのは、さすがに無理だ。

バーガンドは刺突シヨット小剣を脇に小さく構え、そのままこちらの様子を見ていた。そして一瞬しゆん、後ろ足に力を溜め——と、一気に距離きよりを詰め、その剣を突き出す！

——速い！

おれは身体を捻ひねり、その突きを外す！

多くの現代人が勘違いかちごしている事実だが、板金装甲プレートメイルを纏まとった騎士は決して鈍重どんじゆうではない。鎧は着用者の体格に合わせてオーダーメイドで作られるため、関節の動きをほとんど制限しないのだ。鎧を着たまま宙返りをする騎士の話が現代にも伝わっているほどである。増してや、鍛きたえ抜ぬかれた騎士の体力は現代人とは比較ひかくにならない。複雑な技は無理だと

しても、重量に任せて刺突しとつを繰くり出すだけで、なるほど牛頭魔人程度なら一撃で貫つらぬくだろう。バーガンドの踏み込みはそれほど鋭とどく、おれは肝かんを冷やした。

そして——本当に恐ろしいのはこの後だ。

突きをかわしてもバーガンドの突進とっしんは止まらない。体重を預けた長盾カワシールドが、間髪かたはついれず

「くっ……！」

おれは地面を蹴けり、両の足でその盾を受け止めて反動で後ろに跳とんだ。後方に受け身を

取り、一回転して立ち上がる。

——強い。

力や技だけではない、相当に戦い慣れている。さすが、実戦の相手に事欠かないファンタジー世界の騎士だ。その上、相手は素手で、自分は鋼鉄の全身鎧を着こんでいるとき

いる。奴やつにとつては、負ける要素の見当たらない戦いだらう。

とはいえ——

「……やられたっばなしになるつもりはないがな」

バーガンドは身体を揺すり、再び突進の体勢になる。それに相対したおれは、その場で

軽く飛び跳ねて身体を整えた。そして――

「行くぜ……!!」

おれはその場で半回転し――

「……!!」

バーガンドに背を向け、一気に走り出す!

「な……!!」

バーガンドやホランドが戸惑う気配を背に、おれは観衆の貴族の間に突っ込んだ。人垣をかき分け、料理の並んだテーブルを乗り越え、ジグザグに走りまわる。身体を低くし、貴族たちの悲鳴、喚き怒鳴る声の隙間に埋もれるように、走る。

人垣の隙間から、兜の狭い視界の中でこちらを見失ったバーガンドが見えた。おれはなおも人垣をかき乱しながら、手頃なものを探した――よし、これだ。おれはそれと共に、人垣を走り出て一気にバーガンドへと突進する!

バーガンドがこちらへ気づく。しかし、その時にはもう、おれはその足元へ肉薄している。あわててこちらを防ごうとした長盾の前で、おれは地面を蹴り、跳んだ。そして盾の上に足をかけ――手に持った魚のパイの皿を、兜の前面へ思い切り、叩きつける!

「……!?!」

パイ皿によつて突然闇に閉ざされた兜の中で、バーガンドが声にならない声をあげた。

おれはそのまま、バーガンドの肩を蹴つて真上へと、跳ぶ。

広間の天井から吊されたシャンデリアは、バーガンドの巨体を踏み台にすれば充分届く高さにあった。おれはそこに手をかけ、すばやく上に登る。下を見下ろせば、ざわめく貴族たち、そして真下には、暗闇にうろたえるバーガンド。

目の前には、木製のシャンデリアを吊す鎖の基部。おれは手刀を振り上げ――鎖と繋がった部分を、一気に叩き割る!

――ガッシャアアアーン!!!!

派手な音と、おれの全体重ともろともに、落下したシャンデリアがバーガンドの頭上にクリーンヒット! いくら板金装甲で身を固めていようが、これで立っていられる奴はいない!

「……名付けて、秘技・下段燭台・圧殺撃!」

敵を押し潰したシャンデリアから、おれは飛び降りた。

広間の中が数瞬、静まり返る中、おれはシャンデリアの下敷きになったバーガンドに向

け、残心を取る。その姿を見て、ホランドがようやく我に返り、再びそのうるさい口を開いた。

「こ、こんな……卑劣な！　こんな勝負が……！」

わなわなとうろたえながら言うホランド。おれは残心を崩さず、バーガンドを見下ろし、言った。

「大きな武器を持てば、その武器を使いたくなる。分厚い鎧と盾を身につければ、それで身を守りたくなる。そこに隙が生まれる……だからそいつは負けた」

「な……!?!」

「空手とは……武術とは、『選択肢』だ」

おれは周囲の貴族たちにも——そして、口を開けてこちらを見つめているウィルマ姫にもしっかりと聞こえるように、言った。

「戦いにおいて、もつとも避けるべきは選択肢がなく、ことだ。武器を持たなくとも、自身の身体を武器とし、最悪逃げて生き延びることができると。あわよくば相手に勝てる……それが空手だ」

剣と鎧で身を固め、素手の相手を圧倒するしか選択肢がない時点で、バーガンドは不利だったのだ。対して、こちらには取れる選択肢が多くあった。ならば、勝てる戦い方を選

べばいい。

「……き、詭弁だ！　正面から戦えば勝てないがために、そのような理屈を言う！」

「いい加減にしなさい、ホランド公！」

どうやら我に返ったらしいウィルマ姫が横からぴしゃりと言った。前から思っていたが、なかなか芯の強い性格の姫様だ。

「元より不公平な勝負を挑んでおいて、見苦しいことを申すな！　負けた方こそ恥ずべきでしょう！」

「ふん！　下賤のものにふさわしい、野卑な戦い方だ！　まるで山猿だな！」

——と、そのときシャンデリアが動いた。

下敷きになったバーガンドが起き上がったのだ。床に落ちた剣と盾とを手に取り、立ち上がる。

「……なるほど」

どうやら、こいつもホランドと同意見らしい。

おれは言い争うウィルマ姫とホランドに向かい、声をかける。

「……おれは別に、正面からやって勝てないとは言っていないぜ」

「なに……!?!」

おれはバーガンドへ向き直った。呼吸を整えながら、後ろの足に重心をかけ、前脚を浮かせるようにして立つ——「猫足立ち」の構え！

「第2ラウンドと行こうか、バーガンド君！」

おれは再び、重装騎士と向き合った。

3. 空手 vs ドラゴンライダー

バーガンドはより前傾の姿勢を取り、盾を前に、剣を横に大きく広げて構えていた。先ほどのような突進戦術とは違う、近接格闘戦を意識した構えだろう。さすがに警戒をしていると見える。

「いいぜ、バーガンド君……それでこそ武人だ！」

そうこなくては、こちらでも甲斐がないというものだった。実際、鎧を着て油断している相手を虚仮にする方法などいくらでもあるのだ——まあ、さっきのあれは正直、自分でも性格が悪かったかな、と思わないでもない。

「転移者どの……!!」

息を呑み、こちらを見守るウィルマ姫の声が聞こえ、おれは構えたままそちらに言葉を返す。

「ウィルマ姫……空手のことを知りたい、と言ったな？」

「え……？ あ、はい……」

「空手とはなにか……それは『選択肢』、だがそれだけではない。それを今から、お目に

かける」

「……………」

おれは呼吸を整え、相手を見ながらタイミングをはかる。バーガンドはじりじりと、盾を突きつけるようにして距離を詰めてきた。

おれは猫足立ちのまま、相手を待ち構える。間合いは一足飛び——

——ダントツ！

バーガンドが踏み込みと共に、盾での打撃を繰り返して来た。おれは右の中段受けでそれを迎え撃ちながら、身体を捌いて衝撃を受け流す。そこへ、身体を入れて突き出される刺突小剣——！

「……………むん！」

おれの左腕が、上段受けでその剣を弾く！

——刀剣を、素手で受ける。振るわれるその刃をともに受け止めようとすれば、いくら空手で鍛えた身体でも切り裂かれてしまうだろう。しかし——「受け」はボクシングのガードなどとは違う。攻撃してきた相手の力を逸らし、受け流すことがその極意だ。突い

てきた刺突小剣の腹を下からすりあげ、腕の捻りと身体の捌きで衝撃の方向を変え、受け

流す——空手の受けならば、充分に可能だ！

盾と剣を捌いたことで、おれの前に道が開ける——鋼鉄に覆われたバーガンドの懐が、がら空き——ここだ！

「……………ちえすとおーっ！」

半歩、踏み込んで放ったおれの右正拳逆突きが、板金装甲鎧の胸元を叩く！

——ガアァン！

金属を叩いた音が、広間に鳴り響いた。しかし——おれが正拳で打った鎧の胸元には、傷ひとつついていない。

「……………ふん！ 本当に正面から素手で挑むとは、バカめ！ そんなものが通用するわけが……………」

——ガラン。

バーガンドが手にした剣と盾とが、床に落下した。バーガンドは立ったまま、硬直している。

——ごぼっ！

兜の隙間から、吐しゃ物が吐き出され——そしてそのまま、その巨体が崩れ落ちた。

これぞ古流武術の秘技「裏当て」——またの名を二度打ち。

「透勁」などとしても知られる、「身体内部に打撃を透す」技である。腹に当てた打撃が、背中に炸裂することからこの名で呼ばれる。

戦国の昔、鎧を着た武士を鎧の上から打撃で倒した技であり、かつての達人は身体の外から背骨だけを叩き折ったとも云われる——

おれは残心を解き、周囲に声をかけた。

「……加減ができなかった。早く手当てを」

板金装甲鎧の上から打撃を透す力加減がわからなかったのだ。それに、そんな余裕を与



えてくれる相手でもなかった——もしかすると、内臓が傷ついているかもしれない。幾人かの騎士と使用人が、慌ててバーガンズの鎧を脱がしにかかった。

「なんと……なんという……！」

おれは絶句している大臣と、貴族たち、ゲデイス——そしてウイルマ姫の顔を見渡した。皆が呆気に取られている中、ウイルマ姫だけが興奮に目を輝かせていた。おれと目が合うと、ウイルマ姫は慌てたように王族の顔に戻り、一歩前に進み出る。

「ホランド公、あなたの負けです」

ウイルマ姫が言った。

「この方はわたくしの客人であり、国王陛下の客人でもあります。しっかりと遇するのが筋でありましょう。さ、非礼に対して謝罪を」

「……だ、だまれました！ この下賤のものどもが！」

ホランドが再び喚き始めた。

「なにが王女だ！ なにが異世界転移者だ！ 俺は十代も前からこの国を守って来た侯爵家の当主だぞ！ 父も母も、妃も、由緒ある家だ！ お前らのような下賤の血が入り込んで、この国はおかしくなったのだ！」

そしてホランドは、声を張り上げて周囲に告げる。

「賊だ！ 国王陛下の留守中に、姫さまを騙し王宮に入り込んだ賊だ！ 出合え！ 殺してしまえ！」

大臣の発した命令に、騎士団が雪崩れ込む。誰も彼も、鎧や剣、盾を身につけて武装していた。まあ、どうせ最初から用意していたのだろう。

広間に集まっていた貴族たちはパニックになり、我先にと逃げ出した。

「転移者どこの！」

「姫様！ 危険です！」

ウイルマ姫がこちらに駆け寄ろうしていたが、ゲデイスに止められているのが見えた。

「このようなこと……！ わたくしはただ、あの方に……」

混乱の中、ウイルマ姫が言う声が聞こえた。おれはそちらを一瞥し、言う。

「ウイルマ姫……貴女には世話になっている。迷惑をかけるのは本意ではない、が……」
おれは騎士団の数を数えた。武装した騎士が、ざっと数えて20人。いずれも、板金を縫いつけて強化した鎖帷子を着込み、鉢兜を被っている。バーガンズを倒されたことで、みな一様に殺気立っていた。

おれは、大きく息を吸い込み——叫んだ。

「ここまでされて、大人しくしているほど……おれは聖人君子ではない！」

おれは構えさえもとらず——地面を蹴り、騎士たちの中へと突っ込む！

騎士たちは不意を突かれ、反応が遅れる。いつも思うのだが、多人数でひとりを取り囲もうという連中はどうして、相手が大人しくしていることを前提に動くのだろうか。

おれはそのまま床を蹴って跳び、先頭にいた騎士の頭上を飛び越え、その後ろの騎士に跳び蹴り！

ガゴオン！

鉢兜を叩く鈍い音。鋼鉄に遮られて打撃は通らないが、全体重を乗せた蹴りで頭を叩かれた衝撃を、騎士の首が支えきれぬか。蹴られた騎士が弾かれたようにその場に倒れたとき、その反動で逆へ跳んだおれは、次の相手の兜を掴み、着地と同時に地面へと叩きつける！

「囲め、囲めえ！」

騎士の中のひとりが大声を出す。おれは着地後の低い体勢のまま、そちらへと走った。

「……なっ……！！」

瞬時に肉薄したおれの姿に、指示を出していた騎士はぎよっと驚く——と、次の瞬間、

その騎士は糸が切れた人形のように、崩れ落ちた。

手のひらの下部、手首に近い部分——掌底での打撃。この部位で顎を打つことにより、相手の頭部を激しく振動させ、脳震盪を起こさせる。

「壊す」のではなく、「倒す」ための技——先のバーガントは肩と一体化した兜を被っていたため通用しなかったが、頭に乗せているタイプの兜であれば、むしろその威力は増す！

周囲の騎士たちが動揺するよりも早く、おれは身体を返し、掌底でもうひとりの意識を刈り取る。

手薄になった囲みを抜け、おれは走った。集団戦で最も重要なことは、囲まれないこと。死角に敵を置かないことだ。騎士たちの背後へと抜け、広間の出口へと走って中庭に出る。そこへ、追いつがってきた騎士が、2人。

「……はああっ！！」

瞬間、おれは反転してその騎士たちに向かって跳び、下段の蹴りで膝関節を正面から蹴り砕く！

「ぐああ……ッ!?」

騎士たちは悲鳴をあげ、その場に崩れ落ちて悶絶した。

「関節蹴り」——この技が的確に決まれば、一撃で相手を戦闘不能に追い込む。確実に人を「壊す」技であるため、多くの試合では禁じ手とされる——目潰し、金的に次ぐ実戦ケンカ殺法のひとつだ！

倒れた騎士たちをその場に残し、おれは跳び退って中庭へと立った。そしてその場で、広間の入り口に向かい、構えを取る。

「くっ……！」

騎士たちは迂闊に、扉から中庭に出ることができない。出てきた端から、関節を蹴り碎いてやろうとおれは身構えていた。

空手は「選択肢」だと先ほどタンカを切ったが、逆に言えば闘いとは、いかに相手に不自由を迫るかという駆け引きでもある。騎士が何人いようと、この正面の扉から向かってくるしかないのであれば、ひとりずつを相手にすると変わりはない。もちろん、増援が来なければの話だが——

——バサツ、バサツ

——どうも、懸念があたったようだ。中庭の上空から聞こえてきた、巨大な布団を扇ぐ

ような音。

おれは扉の中の騎士たちを警戒しつつ、首を巡らせ、上空を見やった。

巨大な革の翼がそこに羽ばたいていた。先ほど馬車を曳いていたこの世界の「馬」に似た、おそらくは竜の一種——長い首に長い尻尾、前脚が巨大な翼となり、その翼で空を自在に飛翔する、いわゆる翼竜！

「……まさか！ 騎竜士まで動員するなんて！」

ウィルマ姫の声が聞こえた。翼竜の上に乗った、赤い鎧の騎士が手綱を手繰る。その動きにあわせ、翼竜がその爪をこちらへ向けた！

「まったく、大歓迎だなホランドさん！」

急降下してくる翼竜に向かい、おれは身構えた。

* * *

騎竜士——これはあとからウィルマ姫に聞いた話だが、それはこの国で、戦争に使われる「兵器」なのだという。

下等竜種の一つ、飼いならすことが可能な種類の翼竜に人が騎乗し、空から攻撃を仕掛ける。現代社会でたとえれば、城内で暴れる狼藉者に対し、戦闘ヘリを引っ張り出してき

たようなものだろうか。

それほどに、ホランドは「次元遊者」を恐れているということだろう。しかし——

「……これこそ異世界に来た甲斐があるってもんだ！」

空を飛ぶ相手との戦い——これはある意味で、おれの長年の夢だった。なにしろ、現代社会ではまず、戦えない相手だ。もし、相手が空を自由に駆け、攻撃してくるとしたら、どうするか。頭の中で何度も考えこそすれ、使うことはないと思っていた数々の戦術。それを今——存分に振るえる！

上空から遅いかかる巨大な鉤爪。それをおれば、横に跳んで避ける。体勢を崩さず、反撃に移ろうとした、その時——

「……！」

脇合いから、翼竜の長く太い尻尾が飛んで来た。

間一髪、身をかがめてそれを避ける。尻尾の先の、大ぶりの刀剣ほどもあるうかという、鋭い棘が空を斬る！

さらに、旋回した翼竜の上から、騎士がその小脇に構えた弩弓を放つ。体勢を崩していたおれは、地面を転がりかろうじてそれを避ける！

なんとという恐ろしい連続攻撃——そしてこちらが体勢を立て直したころには、相手は上

空へと逃れているのだ。

「……危ない！」

ウィルマ姫の声がした。

見上げると、上空から翼竜が首を巡らせ、こちらに向けて口を開いていた。

——ゴォッ！

その口から吐き出される、高温のガス流！ 危険を察してその場を跳び退り、直撃を免れたものの、空手着の裾が焦げるこの威力！ ガスに炙られた地面の雑草が真っ黒になって碎け散るのが見えた。

おれは戦慄した。目に見えないガスの流れ——そんなものを、どうやって受ければいいのか。この時の経験からのち、こうした特殊攻撃に対して廻し受けでの捌きを使い始めるのだが、この時ばかりは初めて目にしたモンスターの特殊能力に、おれはただ驚くばかりだった。

先ほどおれを取り囲もうとしていた騎士団も、大広間の方から遠巻きにこちらを見ていた。あの「兵器」の攻撃に巻き込まれてはたまったものではないのだろう。その後ろに隠

れ、ホランドもにやにやししながらこちらを見ている。

ホランドの顔にイラツとしていた場合ではなかった。騎士が再び、弩弓に矢を装填し、こちらを狙っている。これがまた厄介だ。翼竜の大雑把な攻撃の合間に刺し込まれる、鋭く正確な射撃。大臣はクズだが、まったくこの国の騎士には手練が揃っている。

「感心ばかりしてらんねえな……!」

おれはその場で体勢を整え——「猫足立ち」に構えた。全身を柔らかく保ち、神経を研ぎ澄ます。

騎士が翼竜の上で弩弓を構え、こちらへと照準をあわせた。その指が引き金を引き絞るのを、おれは見た——

——ザシユツ!

放たれた太矢が、おれの背後の地面に突き刺さった。

「……見切った……!」

おれは後ろ足を引き、半身を開いてその場に立っていた。

——空手の技術の中には、刃物を持った相手を想定したものも多くある。正面から突いてきた刃物に対し、弧を描くように片足を引き、身体を開くようにして捌く。相手の狙う場所とタイミングさえわかれば、飛び道具に対してもやることは同じだ。

空手の防衛において重要なのは、自分の攻撃体勢を保ったまま、相手の攻撃を受け流すことにある。この時の例で言えば、大きな移動をせず、敵の攻撃をかわすことが必要だった。

「……むっ……!」

案の定である。

翼竜は大きく旋回し、おれに脇を見せていた。

巨大な鉤爪、尻尾の棘、高温のガスに弩弓——どれも必殺の一撃だ。騎士士の戦術は、威力のある攻撃を重ねることで相手を追い込むことにあるとおれは見た。そのせいか、どうやら相手が攻撃を大きく避けることを前提としている。

手練であるほど、相手の動きの先を読み、その先に攻撃を重ねてくる。そして今——最小限の動きで攻撃をかわしたことで、その戦術に隙が生まれた!

小回りの効かない翼竜が旋回し、こちらへまた鉤爪を向ける。おれはそこへ向かい、走る——!

「……たああっ！」

充分に助走をつけ、降下してきた翼竜へ向かい、跳ぶ！　そしてすれ違いざまに、そのこめかみへと叩き込む跳び後ろ蹴り！

予想外の攻撃に一瞬、翼竜は体勢を崩した。おれは着地し、そのまま再び敵へ向かって走る！

地面すれすれの高さで体勢を立て直した翼竜が、こちらに向かって口を開いた。その口から、高熱のガスが噴き出す——今だ！

おれは思い切り地面を蹴り、跳んだ。

翼竜の口から吐き出される熱流を足元に飛び越え——そしてそのまま、翼竜の肩口へと組みつく！

翼竜は慌てて羽ばたき、身体を上昇させる。騎士は組みついてきたおれに対し、弩弓を捨てて剣を抜いた。

「おっと！　お前には用はないんだ」

おれは騎士が剣を振り下ろすよりも早く、「技」へと移行した。首元から、羽ばたくその翼の肩口へと足をかけ、人間でいう肘関節のあたりへと組みつく。

「関節技」——それこそが、「空を飛ぶ相手」に対し、おれが出した答えだ！

翼竜の大きな翼を支える関節——「空を飛ぶ」というのは元来、デリケートな行為なのだ。その関節を極めてやれば——途端に翼竜は、その飛行能力を失う！

翼竜は地上10mほどの高さ上昇していたが、肘関節に詰まった関節技という異物によってバランスを崩し、錐揉み状に落下を始めた。おれは体重を移動して、翼竜の頭を下にし、足でそれを押さえつけるようにして、そのまま——

「……必殺・腕ひしぎ翼竜落とし！」

——ゴシヤアアアツ！

全体重を乗せ、地面に叩きつけられた翼竜は首がおかしな方向に曲がり、泡を吹いてその場に倒れた。乗っていた騎士は放り出されて地面に落ち、気を失っている。

おれは立ち上がり、乱れる呼吸を整えながらホランドたちの方を振り返った。

「さあ！　お次はおらんかあつ！」

——恥ずかしいことだが、おれはこの時、完全に頭に血が上っていた。この際このまま、この国の連中を全員叩きのめしてやろうとさえ思っていた。どうせこの世界へは、空手の

可能性を試しに来たのだ。体力の続く限り、現代社会ではやれないくらい、暴れまわってやるうではないか——

ドラゴンライダー
騎竜士を倒したおれの殺気に気圧されたのか、騎士たちは遠巻きのまま、だれも前に出て来ない。

「どうした！ もう終わりか！ そちらが来ないなら、こちらから……」

「それまで！ もうよい！」

がなり立てるおれの声をかき消す、よく響く声。

「拳を引かれよ、転移者どの。大臣の非礼は余が詫びる」

静かな威厳に満ちた声とともに、中庭へと姿を現した壮年の男——引き締まった体軀、鋭い眼光に豊かな顎髭、ウイルマ姫よりも濃い灰色の髪。短い衣に、緋色の裏地を打った黒の外套、そしてその頭には黄金の冠——

「……お父様！」

「……陛下！」

その場にいた貴族、騎士たちが一斉に片膝をついた。

* * *

「大臣が迷惑をかけた。不在のこととは言え、責任を感じる」
外套を脱いだ国王が言った。

城の中に行くつかあるという、国王と家族の部屋。そのひとつにおれは通されていた。

先ほどの大広間とは対照的に、質素で地味な作りの部屋——

テーブルを挟んだ向かいの椅子に、国王は腰掛けた。

「迷惑どころの騒ぎじゃない。こちらは殺されかけたんだ」

おれは椅子に座らず、立ったまま答える。身体は依然として、周囲に気を張っていた。

「……今だって、殺されかけている途中かもしれない」

おれが殺気を隠さずに言った言葉に、国王は表情ひとつ変えず答える。

「警戒するのも当然だ。ただ、個人的な意見を言えば……もしこの部屋に罠が仕掛けられていても、君を殺せるとは思えないよ」

国王がニヤツと笑う。

「実は途中から見ていたんだ。君のその、カラテ、か？ 素晴らしい技だな」

おれはその言葉にまたカチンと来た。途中から見えていた、だと？

慥慥に振る舞っているが、結局こいつも、あのホランドとかいう大臣と同類ということか。そう思うと、身体がまた熱くなってくる。だいたいなんだこの男は。さつきまで暴れ

ていた男と、こんな近い距離で、その気になれば一撃で殺せる間合いで。おれの空手を舐めているのか——

「君がその気になれば、この場で俺を殺すこともできるのだからな」

突然、おれの頭の中を見透かしたかのように、国王が言った。不意を突かれて、おれは一瞬動揺する。国王は再び、ニヤツと笑ってみせた。おれは平静を装い、言う。

「………だったらどうする」

「どうもしないさ。それならそれでも構わない」

「な……」

「………君がひとりでのこの国の騎士団と渡り合える以上、君という存在は一国の軍隊と変わらない。だからこそこうして、2人で話をさせてもらっている。これは和平交渉だよ。この距離がその証だ」

国王の目は真剣そのものだった。

ああ——この目は。

おれは組手に臨む道場仲間たちのことを思い浮かべた。

どちらが強い、弱いではない。ただただ真剣に、目の前の相手と向かいあい、自分のすべてをぶつける——そういう目だ。

ここは依然として、戦いの場なのだ。

それに比べて、先ほどまでの自分の心の、なんと貧しく、醜いことか。おれは心底自分が情けなくなつた。元より聖人君子であるつもりはないが、これでは空手の精神を語れるようなものではない。

おれは椅子に座り、頭を下げた。

「………頭に血が上っていたようです。失礼をお詫びします………国王陛下」

「ウイルヘルムだ」

「………え？」

「ウイルヘルム・ダス・ウィルム・ヴァンフリー。俺の名前だ。ウイルヘルムと呼んでくれて構わない」

国王は真剣な面持ちから、一転して破顔した。その顔が、なんとも言えず人懐っこい笑顔だった。

「言っただろう？ これは和平交渉だ。つまり、君は一国の王と同等。だったら、君と俺は対等だ」

——おれは参ってしまった。かつて、こんな風に接してきた者がいただろうか？

おれが今までに出会った「権力者」たちは、目の前の相手を自分の下に置くことにはか

りかまけていた。それが、この男は王という立場、威厳を崩すことなく、相手を下にも置かない。ごく自然に「王」として振る舞う、これが生まれつきの王、本当の権威というものか——

おれは改めて、国王を——ウイルヘルムを見た。この男を今ここで倒すのは容易いだろう。しかし——それでは多分、この男には勝てない——

「……和平などんでもない。おれの負けだ……ウイルヘルム」

それは、この異世界で初めての敗北——おれの敗北宣言を聞いたウイルヘルムは、また人懐っこく笑った。

* * *

「そもそも始まりは、10数年ほど前の『魔導大戦』……魔王との戦いにおいて、お前のような異世界からの転移者が活躍したことにある」

ウイルヘルムが陶器のゴブレットを傾けながら言う。おれもウイルヘルムと同じ、エールの入ったゴブレットを手に話を聞いていた。

王国軍が太刀打ちできない魔王の軍勢を押し返したのが、「裏技」を持つ次元遊者だった、とウイルヘルムは語る。

「そこまではよかった。問題はその後だ」

「……と言うと？」

「この国では、戦いは本来、貴族や騎士の仕事だ。もつとも、最近は冒険者たちも矢面に立ってはいるが……」

ウイルヘルムはゴブレットをひと口飲み、続ける。

「魔物や近隣の国……そうした外敵と戦うことで、支配層はその権威を確立している。民衆は彼らに守ってもらって代わりに、税を納める……それがこの国の仕組みだ。だが、その『本職』たちが勝てなかった相手を、余所者が……騎士でもなんでもない余所者が倒し、世界を救った……そうすると、どうなるか？」

「つまり、面目を失った、と……？」

転移者が活躍すれば、貴族たちがその権威の正当性を失う——おれは、「邪道」である自分の空手が世に出たときの、周囲の反応を思い起こしていた。新しく、強く、鮮烈なものへのほとんど反射的な拒絶。あの大臣ホランドの反応はそれに近いものがあった。

ウイルヘルムは続ける。

「民衆は彼らを英雄視する。そうすれば王国の支配の基盤が揺らぐだけではない。魔王を倒すほどの力を持った者がこの世界にいて、いつこの社会を脅かすのかという恐怖だって

ある」

ウィルヘルムはゴブレットをテーブルに置き、身を乗り出して真剣な顔でこちらを見つめた。

「貴族たちが自分の立場を失うことを恐れている、という単純な話ではない。お前たち転移者は、この世界の成り立ちそのものを否定しかねないんだ」

「……おれにそんなつもりはない」

「お前はそうだろう。だが、もし、世界を覆し得る力を手にしたとして……人間は正気を保っていられるのかな」

ウィルヘルムはそう言って、再びゴブレットの中のエールをあおった。

（力、か……）

ゴブレットを持つ自分の手の拳が目に入った。

おれはエールを飲んでみた。苦味ばかりが舌に残ったのは、この世界の飲み物に慣れていないせいだっただろうか。

ウィルヘルムは顔を少し崩した。

「……いや、すまん。少々愚痴っぽくなった。それで……お前は这个世界で、なにをするつもりなんだ？」

「……空手さ」

おれはそう言って、ゴブレットの中身を飲み干した。

異世界転移——おれは「女神」を思い出した。東宮のグレンとかいうあの女神は、おれがこの世界に来た理由についてはよくわからないと言っていたが——もし、なにかの目的があるのだとしたら。

かつて魔王を倒したという、おれと同じ次元遊者——その男は、魔王と戦うために導かれたのではないのだろうか？ だとすれば、おれは——？

いや——下手な考えはよそう。おれは頭を振り、エールをもう一度あおった。

この国を揺るがすほどの力を持つという、異世界からの転移者——しかし、いくら強い力を持っていたとしても、それで世界に影響を及ぼそうなどというのはおこがましい考えだ——そのことはおれ自身、現実世界での経験でいやというほど痛感していた。

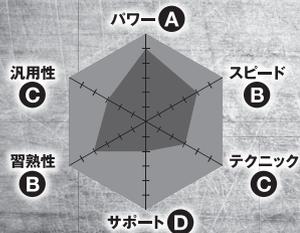
だからこそその空手、だからこそその武道——世界がどのようなであつても、どんな境遇にあらうとも、自分自身がそこに在ることを肯定し、貫くための道。それはたとえ、ファンタジー異世界にあらうとも変わることはないのだから。

おれにできることは、ただ空手あるのみ。自分にできることを精いっぱいやる。ただそ

れただけだ――

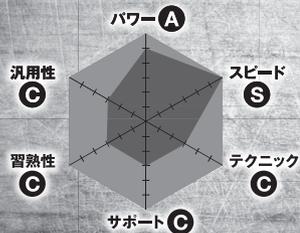
だが、おれはこの後、自身のそうした信念を揺るがす相手と巡り合う。そしてそれは、この異世界で最大の宿敵との出会いでもあった。

BATTLE STYLE: 重装騎士



分厚いプレートメイルで身を固めた騎士に、正面から挑むのは愚か者のすることである。突突に適した肉厚の小剣を構え、全身の重量をも乗せたその突進を止めることは不可能に近い

BATTLE STYLE: 騎竜士 《ドラゴンライダー》



ヴァンフリー王国ではレッサードラゴンを飼育し、移動や運送の手段として利用しているが、翼竜《ワイバーン》を乗りこなして戦闘を行うエリート騎士は戦場の華であり、人々から尊敬と畏怖とを集めている

4. 空手 VS 王女

「おはようございます、先生！」

戸口から差し込む日差しと、やたらと元気のいいその声とでおれは起こされた。

おれは当面、ヴァンフリーの王城に客分として滞在することになっていた。ただし、体裁としては「軟禁」ということにしているらしい。実際には、城の裏手にある離れのような屋敷をあてがわれ、自由に使っている、と言われている。出入りも自由だし、ウィルヘルムに仕える小姓がいろいろ、身の回りの世話もしてくれるため不自由はないが——問題は、これだった。

「……おはよう、ウィルマ姫」

おれがここに滞在を始めてから、ウィルマ姫は毎日のようにここへやってきていた。それも、おれが日課の朝稽古を始める時間に。

「……とここで、『先生』はやめてもらえないか？」

「じゃあ、師匠！ お師さん、とか？」

「そういう言葉、どこで憶えるんだ」

そう、あの騎士団との乱闘以来、ウィルマ姫の空手熱はさらにヒートアップし、熱心に「空手を教えろ」と迫ってくるようになったのだ。

「何度も申し上げているように、おれは異世界に来たばかりで、弟子をとっている余裕はないと……」

「大丈夫です！ お邪魔にならないように稽古を見えますから！」

「う、うむ……」

芯の強さを感じてはいたが、どうも予想以上にアクティブな性格のようだった。最初に会ったときはもつと儂げな印象だったのだが。

おれは、乱闘の後で騎士ゲデイスと交わした会話を思い起こした。

「……どうやら、おれはあんたに利用されたようだな？」

「さて……なんのことですかな」

おれの問いに、ゲデイスは飽くまで慫慂な態度を崩さないかった。

「おれをこの王城に招き、ホランドが歓迎の宴を開く……結果、ああなることは予想できただけだ」

「私としては国王に会っていただければ、それでよかったですね」

ゲデイスが涼しい顔で言い返す。

「いずれにしろ……『次元遊者』というのはそれほど危うい存在なのですよ」

「ならばなぜ、おれを殺そうとしなかった？」

ゲデイスはおれの目を見た。

「貴公にはわからんだろうが……エルフの血が混じった姫様は、この国では非常に微妙な立場にある。貴族たちの間では、亜人種に対する差別意識も根強い」

ゲデイスの目は真剣そのものだった。おれはその目の奥に強い精神を感じながら、問い返す。

「……つまり、『次元遊者』をウイルマ姫の側に引き入れることで、中央に対して立場を確保するつもりだった、と……?」

「……それと、もうひとつ」

ゲデイスの表情が一瞬、揺らいだ――

「あの日、我らの城を襲撃してきた黒衣の男……あれも『次元遊者』なのですよ」

おれはその時ようやく、この初老の騎士の目に光る力強さの理由がわかった。それはつまり、必死さの表れであつたのだ――

「魔物の爪も、貴族の権威も及ばない自由の拳！ カラテとはなんとファンタスティックなんでしょう！」

おれが基本の稽古をしているのを見ながら、ウイルマ姫は目を輝かせていた。

「いついかなる時も、自分の肉体のみを信じ、堂々と相手に立ち向かう！ そのようなこと、考えたこともありませんでした」

ゲデイスがそれほどまで必死に守ろうとしているこの姫君――王族であるというだけではない。生まれながらに様々なものを背負っているのだろう。

人が空手を始める理由は様々だ。いじめっ子に勝ちたいから、ケンカに強くなりたいから、アクシオン・スターに憧れて――どんな理由であれ、それは否定されるべきものではない。ウイルマ姫の第8王女という微妙な身分。エルフの血が混じっているという出自。

中央の王政からは半ば排除され、辺境の城に半ば隔離される形で住んでいたという事情――そうした境遇が、この姫が空手に魅せられるきっかけを作ったのかもしれない。もちろんそれは悪いことではない、が――

「わたくしも早く、この手で牛頭魔人を倒してみたいです！」

「……ちよっ！ 待って待って！」

おれは思わず稽古を止めた。

「……いいですか、ウィルマ姫。空手とは、魔物と戦うためのものではないのだ」

「ではなぜ、先生は魔物と戦うのです？」

「それは……」

それは――

「……まあ、いろいろとあるのだ」

「カラテとは、いろいろあるものですね」

「間違っ^{まちが}てはいないがちよっと待て」

どうも調子が狂^{くる}う。

もちろん、弟子や後輩^{こうはい}を指導し後進を育成するのも空手家の大事な務めではある。だがおれは、この世界に空手を広める覚悟^{かくご}をしてきたわけではなかった。なにしろ、アメリカやヨーロッパとは違うのだ――この世界そのものにとって異分子であるおれが、それをしているものかどうか。

しかし――純粹^{じゆんじゆい}に空手に感動するウィルマ姫の目の輝きから、目を背けるのにも罪悪感がある。空手を始めたばかりの子どもたちと同じ目。こういう目の輝きを持ち続けている者は――きっと、強くなるだろうな、とおれは思った。



「……こちらに来たばかりで、人に教える準備ができていないのだ。おれはまだ、この国のことを知らない過ぎる」

「そういうことでしたら！」

目を逸らしながら話を誤魔化そうとしたおれの言葉に、ウイルマ姫は両手を叩いた。

「街に行きましょう！ わたくし、案内いたしますから！」

「あ、ああ……」

どうも、却って妙なことになってしまったようだ。

* * *

「ウイルマさん、こんにちは！ 王都にいらしてたんですね！」

「ウイルマさん、美味しいリングオ入ったよ！ 1個持って行って！」

「ういるまひめさまー。この前の手遊び、またおしえてー」

王城の外に出て街を歩くと、ウイルマ姫の周りには花が咲いたように華やかになった。

通りがかった市民から声をかけられ、店の中からは商品を渡され、そして周囲には子どもたちが集まる。ウイルマ姫も、ニコニコと笑いながらひとりひとり声をかけ、大真面目に子どもたちの相手をする。

「驚いた……大変な人気なんだな」

隣にいたゲデイスに言くと、ゲデイスは得意げに鼻をふくらませる。

「姫様はあの笑顔を庶民にもわけ隔てなく与えておられる。人を愛し、そして愛される天性を持っておられるのだ」

確かに、ウイルマ姫にはどこことなく人を安心させる雰囲気がある。

「男であったなら、確実に王位継承争いに巻き込まれただろう……惜しいとも思うが、それでよかったとも思うのです」

ゲデイスは笑みを湛えていたが、どこことなく寂しげな目をしていた。

おそらく、そのためにホランドなど中央の貴族から警戒されているという面もあるのだろう——現代日本人には想像もつかないことだが、王族に生まれつくというのもまた、難儀なものだ。

「……もつとも、私としてはあまり無防備に街を歩かれるのも困るのですがね」

市民に囲まれるウイルマ姫を見ながら、ゲデイスは苦笑する。確かに、悪意のある者に狙われでもしたら事だ。護身術の基本くらい教えておいてもいいかもしれない——おれはそう思いながら、周囲を見まわした。

街の中央広場へと至る目抜き通りは活気にあふれていた。目抜き通りの向こう側、城壁

の西門の方には、青い空に向かって巨大な尖塔がそびえているのが見える。その尖塔が見守る下を、多くの人々が行き交っていた。道の左右には市が立ち、商人たちが声を張り上げる。

——それはおれにとって、居心地のよい光景だった。かつて武者修行で訪れた世界各地の街の様子が重なる。どの国でも、人々は明るく、力強く、そしてしたたかだ——おれはこの異世界に暮らす人々に、親しみを感じていた。

「……おい、いい加減にしろよ！」

——と、平和な光景を切り裂くような怒号が藪から棒に鳴り響く。

「……なんだ？」

ゲデイスが声の方向を見る。半ば反射的に、剣の柄に手をかけているのはさすがだ、と思いつつ、おれもそちらに目をやる。そこには、荷の崩れた荷車と、その前に立つ怡幅のいい商人風の男、そして、尻もちをついている、耳の尖った小柄な亜人種——

「……半身鬼人などに任せたらこうなるのはわかりきってるんだ！ 盗んだものをさっさと出せ！」

「おいら、盗んでなんか……そつちが間違えたんだろ……」

「この、まだ言うか……！」

興奮した様子の商人が、立ち上がりかけた半身鬼人に蹴りを入れる。

「……ッ！」

胸元を強く蹴られ、身体の小さなその亜人種は大きく後ろに倒れ込む。あの体格差ではひとたまりもない。半身鬼人は石畳に転がり——苦痛に歪めた顔を上げ、商人を睨んだ。

「なんだその目は……！ 下賤な亜人ごときが、人間に反抗するのか！」

商人が半身鬼人を見下ろし、高圧的に怒鳴る。

——まずい。

おれはその時、倒れ込んだ半身鬼人の目に、危険な光を見た。あれは、殺意——！

「……おやめなさい！」

その時、よく通る声が緊迫した空気を抑える。ウィルマ姫が発したその声に、その光がふっと消えた。

「……こ、これは王女様……」

かしこまり頭を下げる商人風の男の前に、ウィルマ姫が進み出て言う。

「いったいどうしたのです？ こちらのほうがなにかされたのですか？」

「や……こいつは港の町から荷を運んで来たのですが、荷物の量を誤魔化しまして……」

「だからそれはそつちの書類の方が……！」

「黙れ！ 半身鬼人なんてみんな泥棒だろうが！」

「……ッ……てめえ……！」

「落ち着いて、ね……」

再び狂気の光が目に見え、半身鬼人を、ウイルマ姫が窘める。その隣から、ゲデイスが進み出た。

「この者が盗みを働いたという証拠は？」

「証拠ですと？ 騎士様ならおわかりでしょう？ こいつは巫人だ。それだけで充分だ！」

「それはこの方が、そう、だという証拠ではありません」

横からウイルマ姫が毅然と言う。

「必要であれば王宮で裁きを預かります。申し立てをするように」

「い、いや、それは……」

商人は目を泳がせた。そして口の中でもごもごとなにかを言った後、半身鬼人に向かい、怒鳴る。

「……もういい！ さっさとその荷物を裏へ運べ！」

そして商人は、路地の方へ入っていった。しかしその去り際、吐き捨てるよ

うに「巫人女め」と呟いた声を、おれは耳にした。

おれはウイルマ姫を見る。ウイルマ姫にもその声が聞こえていたかどうかはわからない。

姫は半身鬼人を助け起こそうと歩み寄っていた。しかし――

――パンッ！

「……ッ！」

ウイルマ姫の手を、半身鬼人が払いのけた。

「……余計なことすんな」

半身鬼人はウイルマ姫から目を逸らすようにしていた。

「……わたくしはただ、あなたを助けたいと……」

「……それじゃあ、俺たちを全員城壁の中に住ませてくれよ」

「え……」

半身鬼人は怒りとも悲しみともつかない目でウイルマ姫を見た。

「あんたはいいよな。お城で暮らして、街も自由に歩き回ってさ。俺たちと変わらないくせによ」

「……！！」

「同情だけされてもなにも変わらねえんだ。哀れに思うのなら俺たち全員を救ってくれ

よ」

彼は横目でウイルマ姫を見ながら吐き捨てるように言い、荷車を曳いて路地へと入っていった。

あの半身鬼人が見せた目の色——おれにはその意味がよくわかった。一度沸きあがった殺意、それを振り下ろす場を奪われたこと——そして、振り下ろすことを許されないことに対するやるせなさ。

ウイルマ姫は唇を噛みしめていた。おれはかける言葉を探していた——おれ自身も武者修行時代、似たような経験をしたことがあった。富裕な国の人間が貧しい国に出かけていき、その暮らしに触れて感じる矛盾——それとどう向き合うべきか、ということ。

ウイルマ姫がふっと顔を上げる。

「……ごめんなさい、面倒なところを見せてしまいましたね」

その顔には再び、高貴で朗らかな笑顔が戻っていた。

「……お腹減りませんか？ どこかでご飯食べましょう！」

ウイルマ姫は精いっぱい軽やかに身を翻した。おれはその後を追い、再び街を歩き出した。

「……ここにしましよう！」

大通りの一角に、その大衆食堂があった。木造の建物は2階までが吹き抜けになっており、店の前にもテーブルや椅子が並べられている。何人かの市民がそこに腰かけ、昼間から木製のジョッキをあおっていた。そこへ突然、ウイルマ姫が現れたと気がついた市民は目を丸くし、顔を見合わせる。

「……この挽肉焼が美味しいのです！」

「……なんでそんなことをご存知なのですか？」

「あ、えつと……」

ゲデイスのツッコミにウイルマ姫が目を逸らしていると、にわかには城門の方が騒がしくなった。

「……あれは？」

そちらの方を見ると、装飾帯をつけた騎士の一団が通りを歩いてくるのが見えた。

「……近衛騎士？ と、いうことは……？」

ゲデイスが言う横から、ウイルマ姫が駆け出す。

「お父様！」

騎士団に囲まれた中から、黒い外套を纏った長身の男——この国の国王・ウイルヘルム

が姿を現す。

「……ウイルマじゃないか。こんなところでなにを？」

「先生に街を案内していました」

「先生……？」

そう呟いたあと、ウイルヘルムはおれの姿を見留め、ああ、と納得した顔をした。横からウイルマ姫が言葉を継ぐ。

「これからここで食事を取ろうとしていたところでした」

「そうか。それでは、我らも一緒に食事としようか」

そう言つてウイルヘルムは、大衆食堂の方へ向かおうとする。その隣にいた白髪の男が慌てた。

「へ、陛下……！！　ここは市民が飲食をするところで、その……」

「いいじゃないか。この挽肉焼が美味いんだよ」

「……どうしてご存知なんですか？」

「……あー、転移者どのも一緒にどうかかな？」

「あ、ああ……」

ウイルヘルムに声をかけられ、おれは食堂に向かった。近衛騎士団が慌ててついてくる。

ここの王族の護衛には同情を禁じ得ない。

* * *

「……ウイルマには悪いことをしていると思つている。あれでも、可愛いと思つているんだ」

ウイルヘルムはエールの入った木のカップを手にし、言う。店の裏側に設えられたテーブルに、料理が並んでいた。挽肉焼というのは、挽肉を固めて焼いたハンバーグのような料理らしい。それはいいが、この肉は一体なんの肉なのだろう。肉汁が出て美味そうであるが。

先ほどまで一緒に食事をしていたウイルマ姫は、子どもや市民に囲まれてなにやら盛り上がり打ち解けてしまつているようだ。その様子を見ながら、ウイルヘルムが話す。

「あれの母親を側室に迎えたのは、巫人間との融和策の一環ではあったが、俺なりに彼女のごとは愛していた。先の『魔導大戦』で全部台無しになつちまつたけどな」

ウイルヘルムの隣から、髪の毛を束ねた男が後を継いだ。

「人々の間には人間至上主義的な思想が根強い。それに加え、『魔導大戦』では猪鬼や黒

エルフといった種族の国が魔王の側につきました。彼らへの不信感は大い」

白髪の男は城付きの賢者・クライフと言った。テールブルの周りには、近衛騎士の装飾帯を纏った騎士が控えている。

「それで、エルフの血を引いている姫さまは、安全のために辺境の城へと移られたわけです」

おれはクライフの話を聴きながら、硬いパンを齧っていた。そういえば、食品の栄養は現実世界と同じなのだろうか。筋肉に必要な栄養素がこの世界で満遍なく補給できるか、一抹の不安がある。

「辺境とは言うが、あれは由緒のある城だ。格式のない城に王族を住まわせるわけにはかない」

ウイルヘルムがクライフの話に口を挟んだ。

「ですが……それが裏目に出てしまった形です」

クライフがウイルヘルムとおれとを交互に見る。

「この方にはお話をしておくべきでしょう。『アズミファルの小手』のことを」

「……」

黙っているウイルヘルムに代わるように、クライフが話します。

「あの城には、強力な魔力を宿す神器のひとつが保管されていました。それを狙って、賊が現れ、姫さまが危険にさらされた……」

「それはもしかして……」

おれはあの時の黒衣の男の姿を思い出す。ゲデイスによれば奴もまた「次元遊者」だという——その男が手にしていた、あの禍々しい意匠の小手。つまり、あれが『アズミファルの小手』——？

「……すでに力の失われた神器だ。ウイルマの命に代えられるようなものではない」

ウイルヘルムが苦々しげに言った。

「ですが、どのような力が秘められているのか、定かでなく……」

「争いの種になるくらいならくれてやるさ」

おれは隣でそのやり取りを聴きながら、神器って硬いのかなあ、試し割りできるかなあ……などとほんやり考えていた。

「……なんのお話ですか？」

ウイルマ姫がテールブルに戻って来た。

「まあ、いろいろとな」

ウイルヘルムがそう答え、そしてこちらに向き直る。

「この際だ。お前、ウイルマを嫁にとらないか？」

——不意にこちらへ向いた矛先に、おれはパンを嘔き出した。

「え……よめ、つて……」

椅子に座ろうとする途中で、ウイルマ姫の動きが固まった。

「え……つと……?」

焦点の合わない目が、こちらへと向く。

「……ちよ……! え、いや……」

おれは慌てて、姫から目を逸らした。

「父親の俺としても安心だし、この際、転移者を王族に迎えてしまえばいろいろな問題が片が付く。貴族どもも文句は言えまい」

「待て、待て待てウイルヘルム……それは……」

「なんだ、不服なのか？」

「あ、いや……」

おれは言葉を探しながら、ウイルマ姫を見る。姫は椅子に座る途中の中途半端な姿勢のまま固まっていた。

「……や、別に嫌だというわけではなく、おれは修行中の身であるからして、その……」

慌てて取り繕うおれを見ながら、ニヤニヤと笑っているウイルヘルム。その隣でクライフがため息をついた。

「……そ、そうだ! ここからは『凱歌の塔』がよく見えるのです! 先生にご案内しなくては……」

中途半端な姿勢から弾かれたように、ウイルマ姫が立ち上がり、外へと駆け出した。ウイルヘルムが、おれに向かって目で合図をする。お前も行け、というわけだ——まったく。おれはため息をついてウイルヘルムを睨みつけ、ウイルマ姫のあとを追って外に出た。

「ほら、あれです! 先の大戦に勝利した記念に、お父様が王都の西門に築いた塔なのです」

店の外に出ると、待ち構えていたウイルマ姫が空を指差しておれに言った。視線を上げてその指の先を追う。町の西側の門から、尖塔が青空を背景にそびえ立っていた。

「あの上からは王都が一望できるだけでなく、近隣の村の様子まで見渡せるのです。国に棲む民の様子をみな平等に見渡し、再び乱が起きようとも迅速に対応できるようにと……」

ウイルマ姫の説明を聴きながら、おれはその塔を眺めていた。現代日本で言えば、10階

建てのビルくらいにもなるだろうか。確かにそれは、この街の中でもひと際高い建物だった——

「……………」

——と、おれは違和感に気がつく。尖塔の先端、その横に浮かぶ、点がひとつ——
「あれは……………」

目を凝らし、おれはそれを見る——空に浮かぶその人影——よく見るとそれは、黒い衣に銀色の胸当てを纏った——

「……………まさか、あの時の……………!?!」

それは、牛頭魔人を使役し、城を襲わせ「アズミファルの小手」を奪った、まさにあの男——その男が、その手をかざす——

——ズッドオオン!

閃光と爆音とが、青い空に炸裂した。

王都を見下ろすようにそびえ立つ「凱歌の塔」が——砕けた。

「……………!?!」

青い空に突然弾けた破壊の光——その一瞬、なにが起こったのかを正確に認識できた者がいただろうか？ 上空から響く轟音、そして衝撃、飛び散る塔の残骸——

「……………危ないッ!」

おれは立ちすくむウイルマ姫を、降り注ぐ瓦礫からかばう！ 上空から石畳に穴を穿つ石の塊——すんでのとこでそれを避け、文字通りに屋根の下へと転がりこむ。

「……………何事だッ……………!?!」

店の中からウイルヘルムと、騎士たちとが駆け出し——空を見上げ、驚愕に固まった。
『『凱歌の塔』が……………消えた……………』

おれも彼らと同じ方を見上げる——先ほどまで確かに、そこにそびえていた高い尖塔の、上半分が文字通り、消し飛んでいた——!

「これはこれは。城まで出向く手間が省けましたな。国王陛下、それに白衣の次元遊者との」
の

降って来た声の方を振り向く。そこには、宙空に立つようにしてこちらを見下ろす、黒衣の男——

「……………ジャゼイド!」

ウイルヘルムが男に向かい、叫ぶ。

「城を襲い、神器を奪ったと聞いた時はなにかの間違いかと思ったが……貴様、狂ったのか!？」

「狂った……?」

黒衣の男——ジャヴィドは、砕け散った塔を背後に背負うようにして、声をあげた。

「……違うな！ 真実に目覚めたのだ!」

「真実だと……?」

「なにが『凱歌の塔』だ! 『魔導大戦』はまだ終わってはいない! 俺は今日、そのことを貴様らに告げに来たのだ!」

ジャヴィドは左手につけた小手を掲げた。

「この『アズミファルの小手』の力で……この俺の手で! 俺は俺の『魔導大戦』を終わらせる! 本当の意味でな……そして!」

ジャヴィドはおれを見た。

「……お前にも死んでもらうぞ、空手家。『裏技』に目覚める前にな!」
 そう言いながらジャヴィドは、片手をかざしてこちらに向けた。

——これはヤバイ!

そう思った瞬間、目の前になにかが割り込む。



「マジンクウオイル
防護壁！」

クライフが唱えた声に 대응するように、目の前が薄く光る。その前で、ジャヴィドの手から放たれた火球が弾ける！

——ドオン！

炸裂する火球に光の壁が砕け、弾けた衝撃でおれは、クライフと共に吹き飛ばされた。
「……ふん、小癩な！」

ジャヴィドは再び手をかざし、火球をもう一発放つ！

ドオン！

炸裂する熱波と衝撃。集まった騎士たちが人形のように吹き飛ぶ。

「こんな強度の火球を連発するとは……なんと……！」

クライフが上体を起こしながら、歯を食いしばり、言った。ジャヴィドは両手を広げ、構えた。宙に浮かんだその身体が、一瞬輝く。

「……この際だ、街ごと吹き飛ばせば手間も省けるか！」

左右に開いたジャヴィドの両手が、蒼白く光り出す。

「あの光……まさか極大核撃……!?!」

クライフの焦る声が聞こえる。

どうやら、かなりヤバイ魔法が来るらしい——おれは周りを見た。騎士たちは吹き飛ばされ、倒れている。ウイルヘルムは——いた。なんと、巻き添えになった市民を助け起している。まったく、なんて男だ！

なんとかしなければ——おれがどうすればいいかと一瞬、考えたその時——小柄な影が走り出た。

「おやめください、ジャヴィド様！」

ウイルマ姫が頭上のジャヴィドに向かい、声を張り上げていた。

「……ウイルマ？」

ジャヴィドの表情に戸惑いの色が浮かび、両の手に携えた魔術の輝きが弱まる。ウイルマ姫が再び、声を張り上げた。

「なぜこんなことをするのですか……!?! あなたは救国の英雄、『魔剣の勇者』ではありませんか！」

「……俺はこの国を救ってなどいない。ただ魔王を倒しただけだ！」

ジャヴイドは叫び返す。

「まだ終わっていないのだ、ウイルマ。救われてなどいない……なにも、誰も！」

「そんなことはありません！ わたくしは……それにお姉さまは……！」

「問答無用！ 邪魔立てするなら、ウイルマ、お前もまとめて吹き飛ばす！」

再び、両の手の光が強くなる——まずい！ おれはジャヴイドの前に走り出、ウイルマ姫をかばって立った。

「よせ！ 用があるのはこのおれだろう！」

ジャヴイドはおれの姿を見、笑った。光が更に強くなる。おれは両の手を広げ、言葉を継ぐ。

「ここには無関係な市民もいる。女もいる。ウイルマ姫だっている。巻き添えにするな！ おれなら逃げない。場所を変えて立ち合おう」

ジャヴイドの眉間が少し、動いたようだった。両の手の光が弱まり——消える。

「……ふふ……私に決闘を申し込むとはな！ やはり、『運命』とは対峙せねばならぬいか……」

ジャヴイドは浮遊魔法の高度を上げる。

「いいだろう。今日の夕暮れ、西の平原だ。私の無限の力を……見せてやる」
ジャヴイドはそう言って、左腕につけた小手を掲げ——放たれた光と共に、その姿はかき消えた。

おれは虚空をしばらく、見つめていた。

ジャヴイドの放った魔法の威力を思い返す。

あの時、クライフが魔法で守ってくれなかったら——あの時、ウイルマ姫が駆け出さなかったら。

おれは歯噛みをした。そして、ジャヴイドの消えた空を見上げる。

「決闘、か……」

上半分の消し飛んだ『凱歌の塔』を見上げ、おれは身震いをした。それは多分、武者震いではなかったと思う。

次元遊者・ジャヴイド。この世界でかつて、魔王を倒した英雄。

数秒で街を焦土と化すことさえ可能な、そんな敵との立ち合い——開始まで、あと数時間。

5. 空手 vs 次元遊者

——白い部屋の窓から、差し込む柔らかい光に煽られるようにしてカーテンが踊っていた。

部屋に置かれたベッドに、見る影もなくやせ細った身体が横たえられていた。土気色の顔にとりつけられた呼吸器の奥で、その口元が動いたような気がした。

おれは、彼に話しかけた。彼がおれを見た。

彼が骨の浮いた腕を持ち上げ、おれに拳を見せた。拳ダコに覆われたその拳を、おれは両手で包む。彼は少し笑い、そしてその目を閉じた。手の中の拳から力が失われ、シートの上に落ちた。

* * *

——おれは目を開いた。

王城の離れの部屋に、正座をしている自分がいた。闘いの前に黙想をしていたはずが、ふと昔の記憶がよみがえって来たのだった。少々心が乱れていたのかもしれない。

おれは立ち上がり、窓の外を見た。二つの太陽が西へと差しかかる。そろそろ覚悟を決めなくてはならない。

闘いの相手——かつて魔王と戦い、この世界を救った英雄・ジャヴィド。人智を超えたその力が脳裏に浮かぶ。

おれは拳ダコに覆われた拳を見た。

おれに、空手に——奴を倒すことができるのだろうか？

「……今からでも、裏技を身につければ、あるいは」

突然聞こえた声に、おれは振り返った。戸口に女が立っていた。

「女神さんか……」

おれをこの異世界に導いた女神・東宮のグレン。銀髪を揺らして首を振り、女神は言う。「『魔導大戦』で魔王を退けたジャヴィドの力は本物よ。その裏技はあらゆる属性の魔力を制限なしに引き出し、複雑な術式や詠唱をすることなく、最大強度の魔法を発動することができる……」

「……」

「素手で立ち向かうなんて、自分から命を捨てに行くようなもの。だから……」

「……武に身を捧げた以上、とうに捨てた命。ここで生きるならそれまでということ」

おれはそう言って、女神の横を通り過ぎ部屋を出た。

「だから死なれちゃ困るんだっての……」

ため息混じりに言うグレンの声は、聞こえないふりをした。この時、裏技チートスキルに惹かれる心がなかったかと言えば、嘘うそになる。

「ジャヴィド様は……強く、そして優しい御方おかたでした。小さな子どもだったわたくしにも、本当によくしていただきました」

あの騒動そうどうのあと、おれの部屋を訪れたウイルマ姫は寂さびしそうな顔で言った。

「あの人の前で……泣いたことがあります。自分の中のエルフの血が憎にくいと……そんなわたくしに、ジャヴィド様は『運命の前では、あらゆる生物は平等だ』と言い、頭を撫なでてくださいました」

「……」

「あの時……あなたが現れ、牛頭ミノタケウロス魔人を倒したあの時、わたくしはただ震ふるえるばかりで、なにもできなかった。目の前で、あの優しかったジャヴィド様が、あんなことをして……」

ウイルマ姫は唇くちびるを噛かみしめた。

「せめて……この2本の足で、あの方の前に立ちたかった。立たなければいけないかった！ 立って、話をしなければ……」

ウイルマ姫が膝ひざの上に置いた小さな手が、強く握にぎられていた。

「……では、空手を習まなびたいと言ったのは……」

ウイルマ姫は顔を上げ、真剣しんけんな眼差まなざしをこちらへ向ける。

「たとえ武器がなくても、戦う力がなくとも……いついかなる時でも堂々と相手に向かい、真実を問う……それがカラテなのでしょう!？」

まっすぐに向けられるウイルマ姫の瞳ひとみには、おれ自身の姿が映っていた。思わず笑みがこぼれるのを、おれは自覚した。

おれはこの姫を誤解していたようだ——不自由なその身の上から来る鬱うつから空手に興味を持ったなどと、あまりに浅い理解をしていた。

「そう……あなたの言うとおりで。どんな状況じょうきょうにあつても絶望せず、自分がするべきことをする。その勇気を支える技術……それが武道、それが空手だ」

弟子に教えられる、とはこのことか——おれはウイルマ姫に向かい、言った。

「だが、技術だけではだめだ。まずは体力づくりから。毎日走って体力を養うこと」

「……ええ?」

おれはウィルマ姫の前にしゃがみ込んだ。膝の上で強く握ったその拳を、自分の両手で包む。

「悔しさのために握りしめたこの拳……この決闘が終わったら、その使い方をきつと、教えましょう」

「……はい！」

ウィルマ姫は目に涙を溜めたまま、輝くように笑った。それはとても、とても力強い笑顔だった。

* * *

それが確か、この世界で初めて見る夕陽だったはずだ。紫に暮れなずむ雄大なグラデーシオンを不吉に感じたのは、その時のおれの心のせいだっただろうか。

ジャヴィドはすでに、そこに立ち待っていた。おれは馬車から降り、決闘の場へと歩む。背の低い草に覆われた広い平原に、風が波を作っていた。

「この決闘は、余が立会人を務める」

おれと同じく馬車から降りたウィルヘルムがよく通る声で宣言する。傍らには数人の騎士団とクライフ——そしてウィルマ姫もいた。

「律儀なことだ」

ジャヴィドはその宣言を冷笑で受け止め、ウィルマ姫を見た。その目の色の意味は、どのようなものであったか。

おれは決闘の舞台へと歩み進んだ。ジャヴィドがそれを受け止めるようにして声をあげる。

「15年ほど前か……『魔王』が現れたとき、俺はこの世界へと導かれ、そして戦った。それはこの次元を統べる神々の導いた必然……運命というものらしい」

「……」

おれは足を止めた。ジャヴィドとの距離は15mといったところか。

「今、お前がこの俺の前に現れたのも、おそらく女神が導いた『運命』なのだろうな。ならばやはり、乗り越えねばならん」

「……お前の詳しい事情を、おれは知らない」

おれは足元を確かめながら応じる。

「立ち合いに理由は要らん。だが……魔王を倒した英雄のお前が、なぜこのようなことをするのか……聞かせてはもらえないか？」

「……この世界へ来たばかりのお前には、わからないだろうな」

ジャヴィドは相変わらず冷笑を浮かべていたが、その目には捉えようのない色が浮かんでいた。

「……あの凄惨な戦いの末には、平和も幸せも訪れなかった。魔王を倒しても、なにも変わりはない。この世界も結局、矛盾だらけだ……貴族どもは肥え太り、民衆は相変わらず日々の暮らしとモンスターの脅威に怯える。街の城壁の外にある巫人街を見たか？」

おれは、王都に来る途中、馬車の中から見た景色を思い出した。粗末なあばら家が並ぶ集落。その隙間で身を寄せ合うようにして暮らす、巫人種たち。そして——昼間目にした、半身鬼人の少年の目の色。

「平和と豊かさの恩恵を受けるのはごく一部。魔王がいてもいなくても同じ。力あるものが力無きものから奪い取る世の中だ。俺たちの故郷と同じだよ」

「……」

「……共に戦った仲間たちが、心ある者たちが、何人も死んだ……あいつらの血で勝ちとった世界がこれか？ だから俺は気がついたのだ。世界そのものを変える力が必要だと！」

おれは黙っていた。答える言葉を持たなかった。しかし、ジャヴィドの瞳に深い絶望と狂気の色が浮かんでいることは感じられた。

「俺が欲するのは無限の力だ！ 世界を根本から創りかえ、『運命』さえも書き換えることのできる力！ 絶対的な力を持った者が必要なのだ……力を持った者が多ければ、また混乱を招く。だから、次元遊者はここで殺し、おれは『運命』を乗り越える……圧倒的な力だな！」

ジャヴィドの身体に殺気が漲り出した。両の手を左右に広げ、そこに魔力の光が浮かんだ。

（……運命を変える力……）

たとえどんなに腕っ節が強くても——空手で熊に勝とうがモンスターに勝とうが、個人力では絶対に抗えない運命。

それを、変える力——

おれはジャヴィドを見た。もしかしたら、この男とおれは似ているのかもしれない。

だが——

おれはその場で足を広げ、ゆっくりと呼吸をした。「息吹」——腕を目の前に掲げて丹田——臍の下に息を溜め、腕を降ろしながらゆっくりと吐く。

そしておれは、肩の幅に広げた足を、大きく後ろへと引き、前の手を目前に掲げ、後ろの手を腰へと構えながら体重を落とす。

構え、そして対峙。間合いは約15m——

「先生……ジャヴィド様……」

ウィルマ姫がこの戦いの行方を見守っている。きつと、彼女自身の運命を見極めようとしているのだろうか。

「……合図を」

ウィルヘルムが言い、騎士団のひとりが大きな鐘を掲げる。別の騎士が、手に持ったハンマーを振るい——決闘の場に、鐘が鳴り響いた。

ジャヴィドがその両手を振りかぶる。その手には青白く輝く魔力の光——巨大な尖塔を消し飛ばすほどの大魔法・極大核撃——

ここしか、なかった。

——メキイ！

——次の瞬間、おれの拳がジャヴィドの顔面にめり込んでいた。

鈍い音と共に、ジャヴィドの顔が弾ける。その身体が後方へと吹き飛び——数m離れた草の上へと、転がった。

「追い突き」——空手の技の中で最も速く、最も速い打撃。

右手を後ろに構え、左脚を大きく踏み込んだ後、右の脚を入れ替えてさらに前へと飛ばしながら、右の突き。

移動してから攻撃するのではない、移動そのものが突きの威力と化すこの技。遣い手によつては10m以上先の敵でさえ、一瞬で打倒することが可能となる！

立ち合いの間合い、ジャヴィドが浮遊魔法を使わなかったこと、そして発動に一瞬の間がある極大核撃を放とうとしたこと——それらの事実が、おれの拳を屈かせた——

「が……はあ……ッ！」

残心を取るおれの構えの先で、鼻の骨を砕かれたジャヴィドが悶えていた。

「勝負ありだ」

ウィルヘルムの声が出た。振り返ると、騎士団がジャヴィドを取り囲もうと動いていた。おれは残心を崩さず、その様子を見守る。

「ふ……はははは！ なるほどな……！」

ジャヴィドは血まみれの顔面を手で押さえ、立ち上がろうとしていた。

「……これもまた、立ち向かわねばならぬ『運命』か……やはり、お前とは徹底的にやりあわねばならんようだ！」

ジャヴィドの身体が紫色の光を放ち出た。その袖口から、「アズミファルの小手」が見える。

「……今日はお前の勝ちだ。誇るがいい……しかし、いずれ必ず八つ裂きにしてやる……この世界の『理』ともろともにな！」

ジャヴィドの姿が魔力の光に包まれ——そしてそのまま、かき消えた。

おれは残心を解き——ひとつ息をつく。

「先生！」

ウイルマ姫が駆け寄ってきた。しかし、おれはそちらに顔を向けられなかった。

——あれで、本当によかったのだろうか？

開始直後の不意討ち。相手の技を出させず、ねじ伏せる勝ち方。

それしか——勝つ方法がなかった。この局面を切りぬけ、生きて決闘から帰るには、これしかなかったのだ。だが——本当にこれで、あの男に勝ったと言えるのだろうか？

力を求め、力でねじ伏せようとしたジャヴィドに対して、こんな勝ち方で、本当に——「……いずれまた、決着をつける 때가来るだろう」

おれはそう言つて踵を返し、決闘の場を後にした。

* * *

「……行つてしまわれるのですね」

その日、朝の稽古を終えたおれにウイルマ姫が言った。

おれはウイルマ姫が汲んでくれた水を飲み干し、息をついた。こちらを見つめる姫の視線を感じるが、おれはそちらを見返すことができなかった。

「……ここにいれば、またジャヴィドが来るかもしれない。そうすれば皆にまた迷惑がかかる」

「その時はまた、先生がやつつけてくれるのでしょ？」

ウイルマ姫は明るく言った。しかし、おれがそれに答えることができずにいると、姫の顔はまた曇る。

「……わたくしにカラテを教えてくれるという約束は？」

その問いかけは、腰の入った掌底突きのようにおれの腹にずしりと響く。

「……いずれ必ず。だが今は……今のおれには、空手を教える資格はありません」
ジャヴィドの力を恐れ、裏技を欲したこと。不意討ちで勝ちを拾ったこと——

腕を磨かなくてはならなかった。いずれ必ずまた立ち合う時のために、そして——奴の欲した「力」に対する答えを見つけるために。

おれ自身が、迷わないために。

「……それに、奴の奪っていった『アズミファルの小手』は左腕。もう片方がどこにあるらしい。それも探さなくてはならない」

それは城の賢者クライフから依頼されたことでもある。そしてそれを追っていけば——自ずと、ジャヴィドとの対決が待っていることになるだろう。

「……それでしたら……!」

ウイルマ姫は強い目でおれを見た。

「わたくしも、連れて行ってください!」

おれはウイルマ姫へ向き直った。

「……無理だ」

「なぜです?」

「危険だ」

「大丈夫です!」

「それに……貴女は王女だ」

「だからどうしたのです!」

「……とにかく、ダメだ」

「……」

ウイルマ姫は無言でおれを見たあと、踵を返して足早に立ち去って行ってしまった。

「……連れて行ってあげたらいいじゃない?」

不意にした声の方を振り向くと、銀髪の女神・グレンがそこに立っていた。

「……そんなわけにいくか」

「まー、その辺は任せるけどね」

「なんの用だ?」

「一応、いろいろ伝えようと思うって」

グレンは長い髪をかきあげてこちらに向き直る。

「確認しとくけど、本当に裏技、いらなのね」

「ああ。おれの望みはただ、空手あるのみだからな」

「はいはい、わかったわかった」

女神は額に手を当て、言った。

「なぜあなたがこの世界に選ばれたのか、まだわからないけど……必ず意味があるはずな

の。あなたでなければいけない理由が……だから、あなたは自分の信じるとおりにやればいい」

「……元より、そのつもりだ」

「ま、そーなんでしようね。どうせ人の話聞かないんだから」

女神はそう言って手を広げ、付け加えるように言った。

「それと、あの神器……『アズミファルの小手』ね。あれは元々両腕で一对のものだったはず……遙か太古に別の次元からもたらされて以降、今は力を失っているけど……でも、気をつけて」

「……奴の目的と、なにか関係があるのかな」

ジャヴィドが欲する力。運命を変え、世界を創りかえる無限の力——

おれは拳を見た。奴とおれの向かう先はきつとひとつだ。それは同じレールの両側からお互いに向かつて全速力で向かう道だ。

「ま、気をつけてね。保険とか利かないからねこの世界」

そして女神は微笑み、その姿が光に包まれた。

「私は女神・東宮のグレン。この世界でのあなたの道行きを示す導くもの。ここから先はあなた次第……行きなさい、白衣の次元遊者よ。あなたの運命の赴くままに……」

女神はそう言って光の中へと消えた。

* * *

翌日の早朝、おれは荷物を担いで部屋を出た。

形式上は軟禁なんきんされている身である。人々に送られて堂々と旅立つわけにもいくまい、と思いい、早朝を選んだのだが——

城の裏手の離れを出たところに、人影ひとかげがあった。

「……ウイルマ姫……」

それは動きやすく丈夫な旅装に、すっかり旅支度を整えたこの国の王女だった。

「来るなど言われても、勝手についていきます」

「……」

「……先生がジャヴィド様といずれ決着をつけなくてはならないように、わたくしもあの方と決着をつけなくてはなりません。先生の修行についていくんじゃない……これはわたくし自身の旅なのです」

おれはため息をついた。短い付き合いではあるが——この姫がこうなったら梃子てこでも言うことを聞かないだろうことは、もうおれにもわかる。だったら、半端はんぱに突き離すよりも

行動を共にした方がいいかもしれない。しかし——

「そうは言っても……王女という立場の方が旅に出るというのは……」

「その心配には及びませぬ」

突然、声のした方を振り返ると、そこには初老の騎士が立っていた。

「ゲデイスさん……」

ゲデイスは笑みを湛えながらこちらに歩いてくる。

「その人は王女ではなく、ただのあなたの弟子でしょう？」

「……え……」

「ウィルマ・デル・ウィルム・ヴァンフリー王女なら、昨日馬車を仕立てて城に帰りましたよ」

「……!!」

ゲデイスはニヤリと笑った。一瞬、呆気に取られていたウィルマ姫が、ゲデイスに向き直る。

「ゲデイス……ごめんなさい。ありがとう」

「姫様、これは姫様の将来のため……そしてこの国の未来のためでもあるのです」

その言葉はウィルマ姫に向けたものだったが——ゲデイスははっきりとおれの方を見、

言った。

「遠からず、この国には試練が訪れます。先の魔導大戦はその始まりに過ぎない……過去の因習や常識が覆り、変革を迫られる日がきつと来る。その時のため、世界をこ覧になってこられますよう。自分自身に向きあわれますよう。そして、戦う術を……強さを、どうか身に付けられますよう」

ウィルマ姫は頷いた。その力強い眼差しを見たおれは、覚悟を決めた。

「承知したよゲデイスさん。姫の身柄、預かるう」

「……頼みますよ、次元遊者。運命の女神の加護があらんことを」

——おれは笑いそうになってしまった。あの女神の加護、か。まあ、ないよりはいいかもしれない。

「……ああ、それと」

ゲデイスはそう言うと、改めておれに向き直り——剣を抜いた。

「……軟禁されていた異世界転移者は、警備の騎士を振りきって暴れ、出て行った……そうですか？」

「……!!」

そうか——貴族たちに対しての体面ということもある、ということだ。

「……難儀なことだな」

「なに、それが仕事でね」

おれは荷物を置き、腰を落として構えた。ゲデイスはその剣の前に突き出すように構え、じりじりと間合いを取る。

「……ぬんッ！」

「……ッ！」

瞬間、ゲデイスが鋭く踏み込み——おれはそれに反応し、蹴りを繰り出す！

——ガッ！

斬撃と打撃が鋭く交差し、そして——おれの背後で、ゲデイスが倒れた。

「まったく……このタヌキ騎士が……！」

おれの蹴り足に伝わった打撃の感触——なるほど、牛頭魔人と戦って、怪我だけで済んだだけのことはある。鎖帷子にみっちり詰まった筋肉は、生半可な鍛え方ではない。

あるいは、あのバーガンド以上——！

「……いずれあんととも、決着をつけねばならないのかな？」

「願い下げですよ。貴方みたいなバケモノは」

ゲデイスは顔をしかめながら上体を起こし、言った。

「……姫様を、頼みます」

おれは頷き、荷物を肩に担ぎ直した。

「……まずは、どちらに？」

自身もまた荷物を担ぎ、ウイルマ姫が尋ねる。

「クライフさんからいろいろ聞いた。港湾の街の冒険者ギルドに行ってみようと思う」

「なにが待っているか、楽しみですね！」

「そうだな……」

おれは朝焼けに染まる空を見上げた。

「なにが待っているかと……おれは空手を信じるだけだ」

そしておれはその朝焼けの方へと向かい、歩き出した。